



Title	イブン・マンマーティーの逸話集に見られる口語的要素 : Middle Arabic資料としての『カラークーシュ』写本
Author(s)	中道, 静香
Citation	アラブ・イスラム研究. 2010, 8, p. 57-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105928
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イブン・マンマーティーの逸話集に見られる口語的要素

——Middle Arabic 資料としての『カラークーシュ』写本——

中道 静香*

Some Colloquial Elements Attested in Ibn Mammātī's Anecdotes

— A Manuscript of *Qarāqūš* as a Middle Arabic Material —

The aim of this article is to explore linguistic aspects of the anecdotes entitled *Kitāb al-Fāšūš fī Ḥukm Qarāqūš* (The book on the stupidity in the judgment of Qarāqūš) by Ibn Mammātī (d. 1209), both a high official and a man of letters in Ayyubid Egypt. A close investigation shows that the text is written in Middle Arabic, which is characterized by the mixture of Classical Arabic elements, vernacular elements, and pseudo-corrections (e.g. hyper-corrections). The study of Middle Arabic is of great significance for the history of Arabic, especially that of colloquial Arabic, since Middle Arabic vernacular elements provide valuable evidences to elucidate the origins and development of colloquial Arabic or modern Arabic dialects. A large number of Middle Arabic materials, mainly Jewish and Christian documents, have been investigated so far. However, *Qarāqūš* is one of (converted) Muslim materials which have been less studied. First, I transcribe the text of the previously neglected manuscript, with a textual comparison with other printed texts. Secondly, I describe orthographical, grammatical, and lexical features attested in these texts and examine whether they reflect earlier Egyptian colloquial Arabic.

1. 『カラークーシュ』とその言語

アイユーブ朝期のエジプトにおいて、ディーワーン（官庁）官僚および文人として活躍したイブン・マンマーティー (Ibn Mammātī, d. 606 A.H./1209 A.D.) は、『カラークーシュの裁きにおける愚かさの書』(*Kitāb al-Fāšūš fī Ḥukm Qarāqūš*) (以下、『カラークーシュ』) という題名の逸話集を残している。この書物は、民衆に対して道理の通らない裁きを下す愚かなアミール、カラークーシュを風刺した小話 (*ḥikāya*) を集めたものである。ここから、横暴なふるまいを意味する「カラークーシュの裁き」(*ḥukm qarāqūš*) という表現も生まれた。本書は歴史を叙述したものではないが、バハーウッディーン・カラークーシュ (*Bahā' ad-Dīn Qarāqūš*, d. 597/1200) という実在の人物¹⁾を主人公としているため、歴史研究の資料としてしばしば参照され、引用

* 日本学術振興会特別研究員 (RPD)

1) カラークーシュにまつわる史実については、本稿の趣旨とは直接関係がないため、先行研究をもとに概略を記すにとどめる。白人宦官のバハーウッディーン・カラークーシュは、アナトリア生まれのトルコ人、あるいはスラブ人といわれる。アサドッディーン・シールクーフ 'Asad ad-Dīn Šīrkūh の所有するマムルークであったが、後に解放された。シールクーフが甥のサラ

されてきた²⁾。一方、本書の言語的側面については、エジプトの口語で書かれたという一般的な言及はあるものの³⁾、これまでその詳細を論じたものはない。実際のところ、テキストは主に古典アラビア語 (Classical Arabic、以下 CA) で書かれているが、その中には CA では使われない口語的語彙や CA の文法規範からの逸脱が明らかに混在している。すなわち本書は以下に詳述する中間アラビア語 (Middle Arabic)⁴⁾の一資料とみなすことができ、アラビア語の通時的研究において、とりわけ現代アラビア語諸方言に至る口語アラビア語の歴史を探る手がかりとして、興味深い対象となる。

Middle Arabic (以下、MA) という用語は様々な要素が複雑に絡んでおり、研究者によっても使い方が異なるが、ここでは Blau (1981: 187) による「中世のテキストにおける⁵⁾、標準アラビア語 (Standard Arabic) と新アラビア語 (Neo-Arabic) と疑似修正 (Pseudo-correct features) とが混在したアラビア語」という定義におおむね従う。標準アラビア語とは、名詞の格 (case) や動詞の法 (mood) を表す語末変化を備えた総合的な (synthetic) アラビア語であり、「古アラビア語」 (Old Arabic) タイプに属する。書き言葉として理念的に共有され、また高い地位を保ち続けてきたアラビア語である。本稿では、この標準アラビア語とほぼ同義の用語として (ただし現代標準アラビア語は含まない)、古典アラビア語 (CA) を使用する。一方「新アラビア語」とは、名詞の格変化や動詞の法の区別の消失、動詞・形容詞・代名詞にお

フッディーンとともにエジプトへ遠征する際に同行し、シールクーフの軍を統括するアミール (司令官) としての任を受ける。ファーティマ朝カリフに代わってサラーフッディーンが実権を握ってからは、宮廷の執務官として行政に携わった。サラーフッディーンがカイロの城塞の建設およびカイロとフスタートを取り囲む城壁の拡張に着手する際、この仕事を託した人物としても知られている。同時代、あるいはそれ以降の歴史家が彼の業績を高く評価する一方で、度を越した厳しい政策 (特にファーティマ朝イスマイール派の影響を根絶するための文化政策など) が問題視されることもあった。このような暴挙に対する反感から、イブン・マンマーティーは『カラークーシュ』をまとめたといわれるが、当然ながら実際の人物像と逸話集における人物像とを同一視することはできない。詳しくは、Casanova (1893), Sobernheim (1978), Hamza (1982), 佐藤 (1991: 95-100, 1996: 120-125) を参照のこと。

- 2) Silvestre de Sacy (1810 [Abd-allatif 1810: 207]), Casanova (1893), 佐藤 (1991: 95-100) など。
- 3) エジプト人作家サリーム・キッチナー (Salīm Kitchener) の戯曲『人形芝居』(*al-Arājūz*) —この戯曲にはカラークーシュが登場人物として出てくる— に掲載された無記名の紹介文には、「おそらくイブン・マンマーティーは彼の書物『カラークーシュ』を大衆に向けて著したのだろう。なぜなら彼はエジプトの口語で (bi-al- āmmīya al-miṣrīyya)、また風刺のきいた一風変わった様式で、その書物を書いているからである。」とある (Kitchener 1996: 裏表紙)。また、ハムザは「文学的側面についていえば、その書物『カラークーシュ』は読者もおわかりのように口語あるいは通俗語 (bi-luḡa 'āmmīya 'aw ša'bīya) で書かれている。それゆえ、我々は文学的研究、本書が取り扱った『風刺』という文学ジャンルの研究をあまり行ってこなかった。」と述べている (Hamza 1982: 12-13)。([] 内は筆者による補足。)
- 4) Middle Arabic に対する日本語訳としては、時代的ニュアンスを加えた「中期アラビア語」(高階 1998: 206) がある。ここでは、文語と口語の特徴を含み、両変種の間中に位置するという(社会)言語学的性質を重視し、「中間アラビア語」と称した。
- 5) ブラウは、「中世」(mediaeval) という時代区分が指す具体的な年代を明らかにしていないが、MA とみなしうる資料は、イスラーム初期 (7世紀) からナフダ (an-Nahḍa) の時期 (19世紀末-20世紀初頭) までと長期に渡って確認されているため、時代を限定することには疑問も呈されている (Lentin 2008: 216)。MA の定義の変遷については、Fischer (1991) を参照のこと。

ける双数形の消失などを特徴とする、分析的な (analytic) アラビア語のタイプを表す。こちらは、現代アラビア語諸方言へと継承される口語的特徴とみなされる⁶⁾。そして、もう一つの要素が、疑似修正 (psuedo-correction) である。疑似修正とは、書き手が高位変種、すなわち CA の文法規則を遵守しようとする努力にもかかわらず、その知識が十分でないために逸脱をおかすことである。この中には、必要のない箇所で CA の形式を使用する過剰修正 (hyper-correction)、実際には CA ではない形式を書き手が CA だと勘違いして使用する過小修正 (hypo-correction) などが含まれる⁷⁾。このように、MA は異なるレベルのアラビア語が混然と含まれているため、MA 研究では、まず資料より CA の規則から逸脱する要素を抽出し、それが口語的特徴 (新アラビア語的特徴) の反映かもしくは疑似修正の特徴かを検討した上で、新アラビア語タイプのより古い層の文法を記述するという方法論がとられる。ただし、その文法記述は資料の性格から当然部分的なものにならざるを得ない。

MA の出現は、7世紀にアラブ・イスラーム軍がアラビア半島周辺の非アラビア語地域を征服し、アラビア語化を進めていった過程での産物とされる。新しい支配地の話し言葉として普及したのは、語末変化のない新アラビア語タイプのアラビア語であったため、その特徴が文書にも混じるようになった⁸⁾。最古の MA 資料は22/642年のパピルス文書とされており⁹⁾、アラブ文法学の発展に伴って8世紀頃に成立した CA よりも古い。また MA 資料の多くは、ムスリムに比べて CA の規範意識にとられないユダヤ教徒やキリスト教徒の手による文書である (それらの言語は、書き手の宗教に応じて *Judaeo-Arabic*, *Christian Arabic*¹⁰⁾ と呼ばれる)。しかし、数は少ないものの、ムスリムによる MA 資料も存在する。たとえばウサーマ・ブン・ムンキズ (*ʿUsāma b. Munqidh*, 1095-1188) の『回想録』(*Kitāb al-Iʿtibār*) は、古典アラビア語の知識を十分もっていたムスリムによる MA 資料である¹¹⁾。このような資料の存在は、著者の CA の習得状況やそれに対する規範意識だけでなく、著述内容、著述の状況、対象とする読者などの要素も、書き言葉に影響を及ぼしたことを示している。

本稿で取り上げた『カラークーシュ』の著者は、次節で述べるようにイスラームに改宗した元キリスト教徒 (コプト) であり、有能な官僚、かつ詩集を含む多くの著作を残した文人であったと伝えられている¹²⁾。しかし、この『カラークーシュ』のテキストは完全な CA ではなく、現代のエジプト (カイロ) 方言とも共通する口

6) Blau (1974: 37, 1977: 2-4)。

7) Blau (1963: 364-365)。

8) Blau (1965: 1-4)。

9) ブラウは初期の研究で85 A.H.の資料が最古としていたが (Blau 1965: 4)、ホプキンスの博士論文 (後に Hopkins (1984) として出版) に基づき、後に22 A.H.と修正した (Blau 1981: 190)。このパピルス文書の詳細については、高階 (2001: 50) を参照のこと。

10) それぞれの包括的な研究として、Blau (1980)、Blau (1966-1967)。

11) 詳しくは Schen (1972, 1973)、池田 (1987 [ウサーマ 1987: 9-19]) を参照のこと。

12) 当然、ある程度の CA の知識を有していた人物と考えられるが、それを検証するためには同著者の他の著作を参照する必要がある。

語的要素を多く含んでいる。これらは12世紀後半以降にエジプトで話されていたアラビア語を反映するものといえる。ほぼ同時期の MA 資料である上述の『回想録』—こちらは12世紀頃のシリア地域の口語を反映する—との比較も意義がある。

以上をふまえ、本稿ではイブン・マンマーティーに由来する写本系統から、先行研究が言及していない写本を紹介し、このテキストにおける MA の特徴を分析する。

2. 『カラークーシュ』の著者および写本系統

この逸話集を著したアル＝アスアド・イブン・マンマーティー¹³⁾¹⁴⁾ (al-ʿAsʿad b. al-Muḥaḍḍab b. al-Xaṭīr b. ʿAbī al-Malīḥ Mammātī) は、アスユートに起源をもつコプトの名家に生まれた。ファーティマ朝の後期からアイユーブ朝にかけて、祖父アブー・アル＝マリーフ (ʿAbū al-Malīḥ)、父ムハッザブ (al-Muḥaḍḍab)、本人のアル＝アスアド (al-ʿAsʿad) と代々ディーワーン官僚を務めている。祖父はキリスト教徒として人生を全うしたが、十字軍のエジプト侵攻以降キリスト教徒に対する風当たりが一層厳しくなり、父ムハッザブの代に一家はイスラームに改宗した¹⁵⁾。アル＝アスアドは、サラーフッディーン (Ṣalāḥ ad-Dīn, 在位1169-1193)、アル＝アズィーズ (al-ʿAzīz, 在位1193-1198)、アル＝マンスール (al-Manṣūr, 在位1198-1199) の統治時代に軍務庁長官をはじめ官庁の重要職を務めた。サラーフッディーンの側近であったアル＝カーディー・アル＝ファードイル (al-Qāḍī al-Fāḍil, 1135-1200) やイマードッディーン・アル＝イスファハーニー (ʿImād ad-Dīn al-ʿIsfahānī, 1125-1201) など政治の中枢にいた人物とも親交があった。しかし彼はその後、アル＝アーディル (al-ʿĀdil, 在位1199-1218) の宰相となったサフィーッディーン・アリー (Ṣafī ad-Dīn ʿAlī) に追放される形でアレクサンドリアに逃れ、606/1209年に62歳の生涯を終えている。著書も多く、20以上の作品を著した¹⁶⁾。

『カラークーシュ』の書かれた年代については、イブン・マンマーティーがその序文に「私はこの書物をサラーフッディーンのためにまとめた」と記しており、こ

13) イブン・マンマーティーの経歴については、ヤークート (Yāqūt, d.1229)、イブン・ハッリカーン (Ibn Xallikān, d.1282)、アル＝マクリーズィー (al-Maqrīzī, d.1442) らの歴史家が伝えており、これらの記述を引用・要約したものとして、Casanova (1893: 461-464), Sobernheim (1978), Ḥamza (1982: 43-53), ʿAṭīya (1991 [Ibn Mammātī 1991: 8-26]), 佐藤 (1991: 96-97, 1996: 134-135)がある。

14) 家名のマンマーティーの由来には、祖父が飢饉の時、特にムスリムの子どもたちに食べ物を施してやったところ、彼らが自分の母親を呼ぶように彼を「マンマーティー」と呼ぶようになったという説 (Slane vol. I, 1842: 195-196)、父親のイスラームへの改宗を機に、「ムハンマドの」を意味する訛ったコプト語を家名に使ったという説 (Sobernheim 1978) がある。

15) ムハッザブ改宗の経緯に関するある記述によれば、宰相に就任したアサドッディーン・シールクーフは、書記官のムハッザブがキリスト教徒であることを知り、それとわかる衣服の着用とディーワーンからの退去を命じた。ムハッザブはすぐに息子らとともにシールクーフの目の前でムスリムとなり、失職を免れた、とのことである (Ḥamza 1982: 47)。シールクーフの宰相就任は1169年であるから、アル＝アスアドが20代前半の頃と推定される。

16) 『詩の秘密』(Kitāb Sirr aš-Šīr), 『サラーフッディーン伝』(Kitāb Sirat Ṣalāḥ ad-Dīn Yūsuf b. ʿAyyūb) など23の書名が伝わっているが (Ḥamza 1982: 50-53)、その大半は残っていない。現存する最も有名な著書が『諸官庁の規則』(Kitāb Qawānīn ad-Dawāwīn) であり、校訂本も出版されている (Ibn Mammātī 1991)。

の記述にそのまま従えばサラーフッディーンの統治時代、すなわち1169年から1193年の間ということになる。しかし、ゾーベルンハイムは「イブン・マンマーティーがこれらの逸話をカラークーシュ (d. 1200) の存命中に集め、公けにしたかどうかわからない」と述べている¹⁷⁾。またハムザは、この書物が書かれた時期をさらに限定し、アル＝アズィーズの死とアル＝マンスールの即位 (1198年) 以後と見ている¹⁸⁾。これら2つの説と、逸話がエジプトで流布したことを勘案するなら、本書の成立は1200年前後の数年間 (イブン・マンマーティーのアレッポ移住前まで) ということになる。

カラークーシュにまつわる逸話にはいくつかの異本が存在し、その著者や題名、含まれる逸話の内容や数が異なっている。Casanova (1893) および Hamza (1982) の先行研究によれば、写本の系統は以下の3つに分類される。

A: イブン・マンマーティー系

イブン・マンマーティーに由来するテキストで、題名は『カラークーシュの裁きにおける愚かさの書』(*Kitāb al-Fāšūš fī Ḥukm Qarāqūš*) である。オリジナルは著者の生年から12-13c.に書かれたものと推定される。この系統の写本としてカイロのヘディーヴ図書館 (1893年当時、現在のエジプト国立図書館 (Dār al-Kutub)) 所蔵の写本『カラークーシュの裁きにおける愚かさの書選集』(*al-Muxtār min-mā Nuqila min Kitāb al-Fāšūš fī Ḥukm Qarāqūš*) があり (写本番号、年代は不明)、14話を含む。

B: アッ＝スユーティー系

ジャラルッディーン・アッ＝スユーティー (Jalāl ad-Dīn as-Suyūṭī, 1445-1505) がカラークーシュ話を収集・再話したテキストで、題名は『カラークーシュの裁きにおける愚かさ』(*al-Fāšūš fī 'Aḥkām Qarāqūš*) である。その序文に899/1493年に書かれたことが明記されている。この系統の写本としては、パリ国立図書館所蔵の写本 Arabe 3552 (旧蔵書番号1548、17世紀) (15話)、カイロのエジプト国立図書館所蔵の写本 majāmī' 194, 416があげられる。

C: アッ＝ラカーニー系

アブドゥッサラーム・アッ＝ラカーニー ('Abd as-Salām al-Laḳānī, d. 1668) を著者とするテキストで、『スルタン・カラークーシュの裁きにおける斑模様』(*aṭ-Ṭarṣ al-Manqūš fī Ḥukm as-Sulṭān Qarāqūš*) と題されている。1200/1786年の日付がある比較的新しい写本で、カラークーシュの肩書がスルタンとなっている点が他の写本と異なる。ミュンヘンの宮廷図書館 (1893年当時、現在のバイエルン州立図書館) 所蔵の写本 Cod.arab. 637がこの系統にあたる。

1893年に発表されたカサノヴァの論文は、バハーウッディーン・カラークーシュに関する詳細な研究であり、この人物にまつわる逸話として、上述のイブン・マンマーティー系のカイロ写本から14話、アッ＝スユーティー系のパリ写本から15話、アッ＝ラカーニー系のミュンヘン写本から9話を転写し、それぞれ仏語訳を行って

17) Sobernheim (1978)。 () 内の没年は筆者による補足。

18) Hamza (1982: 74)。

る（このアラビア語テキストをカサノヴァ版と呼ぶことにする）。その後、エジプト人研究者のハムザがこの逸話集に関する包括的な研究（1982 [初出は1945]）を行っているが、こちらはカラークーシュやイブン・マンマーティーに関する歴史的事実をまとめるだけでなく、この逸話集に対し「風刺」という観点から文学的考察を与えたところに特徴がある。彼は、上記カサノヴァの研究に加えてエジプト国立図書館所蔵のアッスユーティー系写本を参照し、改めてイブン・マンマーティー系の13話分のテキスト、アッ=スユーティー系の11話分のテキスト、アッ=ラカーニー系の2話分のテキストを掲載している（これらをハムザ版と呼ぶ）。イブン・マンマーティー系のテキストについて、ハムザ自身はカサノヴァ版を完全にあるいはほぼ完全に写したと述べているが¹⁹⁾、実際には句読点・疑問符・感嘆符の追加だけでなく、語や一話丸ごとの削除、つづりの変更、カサノヴァ版とは全く異なる語彙の使用（ただし典拠は不明）なども見られ、カサノヴァ版の完全な転写とはいえない。

この他筆者の調査により、上記の研究では言及されていないが、エジプト国立図書館所蔵の写本 majāmī' 59 『カラークーシュの裁きにおける愚かさの書選集』 (*Muxtār min-mā Nuqila min Kitāb al-Fāšūš fī Ḥukm Qarāqūš*) がイブン・マンマーティー系に、大英図書館所蔵写本 Or. 6646 『カラークーシュの裁きにおける愚かさの書』 (*Kitāb al-Fāšūš fī Ḥukm Qarāqūš*)²⁰⁾、およびエジプト国立図書館所蔵の私版印刷本『カラークーシュの裁きと逸話における愚かさ』 (*al-Fāšūš fī 'Aḥkām wa-Hikāyāt Qarāqūš* (Būlāq, 1311/1893)) がアッ=スユーティー系に、それぞれ属することがわかった。次節以降では、これらのうち CA からの逸脱が多数見られるエジプト国立図書館所蔵の写本 majāmī' 59 を資料とし、その内容と言語的特徴を見ることにする。

3. 『カラークーシュの裁きにおける愚かさの書選集』の写本テキスト

はじめにこの写本に関する情報を整理しておく²¹⁾。表紙に、題名『カラークーシュの裁きにおける愚かさの書選集』と著者名アッ=サイード・イブン・マンマーティー²²⁾の記載がある。実際はイブン・マンマーティー以外の人物（名前は不明）が『カラークーシュ』から14話を選んだ「選集」である。写本作成年は876/1471年、5葉（9頁）からなる。複数の写本の合本に含まれているため、通し番号として各葉に169-173の番号が付されている（169表が表紙、169裏-173表が本文）。筆跡から筆者は一人と推定されるが、こちらも名前はわからない。上記の写本作成年が正しければ、15世紀中葉すなわちイブン・マンマーティーの時代から3世紀後の写本である。

19) Hamza (1982: 53)。

20) Brockelmann (1937: I, 572-573)。

21) 筆者は、カイロのアラブ写本研究所 (Ma'had al-Maxṭūṭāt al-'Arabīya) にて入手したマイクロフィルムを利用し、写本調査を行った。以下の情報は、マイクロフィルム版の写本（フィルム版の奥付 (1963) を含む）の他、同研究所のカタログ *Fihris al-Maxṭūṭāt al-Muṣawwara: at-Tārīx*, vol. 2, no. 4 (1970) の該当箇所から得られたものである。ただし奥付には、題名の一部が（おそらく本文 [173r: 6] に従い）*ḥukm* ではなく *'aḥkām* と書かれ、写本枚数が誤って4葉とされている。一方、写本作成年は奥付とカタログに記載があるものの、写本中には確認できなかった。

22) ここでは名前が al-'As'ad ではなく、as-Sa'id と記されている。カサノヴァ版も同様である。

しかし、アッ＝スユーティーがカラークーシュの逸話をまとめる1493年よりは前のため、この写本がアッ＝スユーティー系写本の影響を受けた可能性はない。なお、カサノヴァの参照した写本とは内容がほぼ同じだが、細かい相違点が多数見られ、全く同一の写本ではないと判断できる²³⁾。いずれにせよ、本写本の CA からの逸脱は、イブン・マンマーティー自身 (12-13c.)、当時の筆記者 (12-13c.)、「選集」の選者 (12-15c.)、本写本以前の写本筆記者 (12-15c.)、本写本の筆記者 (15c) という、複数の出処を可能性としてもっている。

以下にこの写本からアラビア語テキストを転写し²⁴⁾、日本語訳を付す。また同じイブン・マンマーティー系テキストであるカサノヴァ版 (Casanova 1893: 463-472)、ハムザ版 (Hamza 1982: 54-61) との相違点および補足説明を注の中で示す。

<アラビア語テキスト>

²⁵⁾ [169r]

- 1: المختار
- 2: مما نقل
- 3: من كتاب الفاشوش
- 4: مما افه القاضي الاجل الكبير الفاضل الاديب السعيد بن مماتي
- 5: عفى الله عنه
- 6: [..و]
- 7: وغفر لنا ولهم اجمعين
- 8: صلوا [منه؟] على اشرف خلقه سيدنا محمد واله وصحبه وعترته

[169v]

- 1: بسم الله الرحمن الرحيم الحمد لله رب العالمين²⁶⁾
- 2: الحمد لله الذي جعل العقل اشرف الاسباب فشراف قوما سماهم اولي الالباب
- 3: وركب الجهل في كل رُس²⁷⁾ ثقيلًا فقال عز من [...]..²⁸⁾ الانعام بل هم اضل
- 4: سيلا قال القاضي الاجل الكبير الفاضل السعيد ابن²⁹⁾ مماتي عفى الله تعالى عنه

23) 本写本の [170r: 8] 部分に存在しない1文がカサノヴァ版に含まれていることが、その最大の根拠である。カサノヴァが依拠した写本は特定できておらず、今後調査する必要がある。

24) 写本には、文字識別点 (diacritical points) が書かれていない場合も多いが、筆者がこの点を補いテキストを作成した。ただし、歯間摩擦音の ɗ (dal) については、発音上の変化を示している可能性があることを考慮して、ɗ とその異字である ɗ を区別した。部分的に付されたシャッダや母音記号は省略した。また、ほとんど表記のない hamza も特に補わず、写本通りとした。

25) [] 内の数字は葉番号、r, v の文字は葉の表 (recto) と裏 (verso) を表す。テキスト行頭の数字は各頁の行番号である。アラビア語本文で、判読できない不明瞭な箇所は [] で括った。

26) カサノヴァ版には الحمد 以降の文言がない。

27) カサノヴァ版では راس。

28) カサノヴァ版では (الأنعام) ٢٥٤ ٢٥٥ ٢٥٦ ٢٥٧ ٢٥٨ ٢٥٩ ٢٦٠ ٢٦١ ٢٦٢ ٢٦٣ ٢٦٤ ٢٦٥ ٢٦٦ ٢٦٧ ٢٦٨ ٢٦٩ ٢٧٠ ٢٧١ ٢٧٢ ٢٧٣ ٢٧٤ ٢٧٥ ٢٧٦ ٢٧٧ ٢٧٨ ٢٧٩ ٢٨٠ ٢٨١ ٢٨٢ ٢٨٣ ٢٨٤ ٢٨٥ ٢٨٦ ٢٨٧ ٢٨٨ ٢٨٩ ٢٩٠ ٢٩١ ٢٩٢ ٢٩٣ ٢٩٤ ٢٩٥ ٢٩٦ ٢٩٧ ٢٩٨ ٢٩٩ ٣٠٠ ٣٠١ ٣٠٢ ٣٠٣ ٣٠٤ ٣٠٥ ٣٠٦ ٣٠٧ ٣٠٨ ٣٠٩ ٣١٠ ٣١١ ٣١٢ ٣١٣ ٣١٤ ٣١٥ ٣١٦ ٣١٧ ٣١٨ ٣١٩ ٣٢٠ ٣٢١ ٣٢٢ ٣٢٣ ٣٢٤ ٣٢٥ ٣٢٦ ٣٢٧ ٣٢٨ ٣٢٩ ٣٣٠ ٣٣١ ٣٣٢ ٣٣٣ ٣٣٤ ٣٣٥ ٣٣٦ ٣٣٧ ٣٣٨ ٣٣٩ ٣٤٠ ٣٤١ ٣٤٢ ٣٤٣ ٣٤٤ ٣٤٥ ٣٤٦ ٣٤٧ ٣٤٨ ٣٤٩ ٣٥٠ ٣٥١ ٣٥٢ ٣٥٣ ٣٥٤ ٣٥٥ ٣٥٦ ٣٥٧ ٣٥٨ ٣٥٩ ٣٦٠ ٣٦١ ٣٦٢ ٣٦٣ ٣٦٤ ٣٦٥ ٣٦٦ ٣٦٧ ٣٦٨ ٣٦٩ ٣٧٠ ٣٧١ ٣٧٢ ٣٧٣ ٣٧٤ ٣٧٥ ٣٧٦ ٣٧٧ ٣٧٨ ٣٧٩ ٣٨٠ ٣٨١ ٣٨٢ ٣٨٣ ٣٨٤ ٣٨٥ ٣٨٦ ٣٨٧ ٣٨٨ ٣٨٩ ٣٩٠ ٣٩١ ٣٩٢ ٣٩٣ ٣٩٤ ٣٩٥ ٣٩٦ ٣٩٧ ٣٩٨ ٣٩٩ ٤٠٠ ٤٠١ ٤٠٢ ٤٠٣ ٤٠٤ ٤٠٥ ٤٠٦ ٤٠٧ ٤٠٨ ٤٠٩ ٤١٠ ٤١١ ٤١٢ ٤١٣ ٤١٤ ٤١٥ ٤١٦ ٤١٧ ٤١٨ ٤١٩ ٤٢٠ ٤٢١ ٤٢٢ ٤٢٣ ٤٢٤ ٤٢٥ ٤٢٦ ٤٢٧ ٤٢٨ ٤٢٩ ٤٣٠ ٤٣١ ٤٣٢ ٤٣٣ ٤٣٤ ٤٣٥ ٤٣٦ ٤٣٧ ٤٣٨ ٤٣٩ ٤٤٠ ٤٤١ ٤٤٢ ٤٤٣ ٤٤٤ ٤٤٥ ٤٤٦ ٤٤٧ ٤٤٨ ٤٤٩ ٤٥٠ ٤٥١ ٤٥٢ ٤٥٣ ٤٥٤ ٤٥٥ ٤٥٦ ٤٥٧ ٤٥٨ ٤٥٩ ٤٦٠ ٤٦١ ٤٦٢ ٤٦٣ ٤٦٤ ٤٦٥ ٤٦٦ ٤٦٧ ٤٦٨ ٤٦٩ ٤٧٠ ٤٧١ ٤٧٢ ٤٧٣ ٤٧٤ ٤٧٥ ٤٧٦ ٤٧٧ ٤٧٨ ٤٧٩ ٤٨٠ ٤٨١ ٤٨٢ ٤٨٣ ٤٨٤ ٤٨٥ ٤٨٦ ٤٨٧ ٤٨٨ ٤٨٩ ٤٩٠ ٤٩١ ٤٩٢ ٤٩٣ ٤٩٤ ٤٩٥ ٤٩٦ ٤٩٧ ٤٩٨ ٤٩٩ ٥٠٠ ٥٠١ ٥٠٢ ٥٠٣ ٥٠٤ ٥٠٥ ٥٠٦ ٥٠٧ ٥٠٨ ٥٠٩ ٥١٠ ٥١١ ٥١٢ ٥١٣ ٥١٤ ٥١٥ ٥١٦ ٥١٧ ٥١٨ ٥١٩ ٥٢٠ ٥٢١ ٥٢٢ ٥٢٣ ٥٢٤ ٥٢٥ ٥٢٦ ٥٢٧ ٥٢٨ ٥٢٩ ٥٣٠ ٥٣١ ٥٣٢ ٥٣٣ ٥٣٤ ٥٣٥ ٥٣٦ ٥٣٧ ٥٣٨ ٥٣٩ ٥٤٠ ٥٤١ ٥٤٢ ٥٤٣ ٥٤٤ ٥٤٥ ٥٤٦ ٥٤٧ ٥٤٨ ٥٤٩ ٥٥٠ ٥٥١ ٥٥٢ ٥٥٣ ٥٥٤ ٥٥٥ ٥٥٦ ٥٥٧ ٥٥٨ ٥٥٩ ٥٦٠ ٥٦١ ٥٦٢ ٥٦٣ ٥٦٤ ٥٦٥ ٥٦٦ ٥٦٧ ٥٦٨ ٥٦٩ ٥٧٠ ٥٧١ ٥٧٢ ٥٧٣ ٥٧٤ ٥٧٥ ٥٧٦ ٥٧٧ ٥٧٨ ٥٧٩ ٥٨٠ ٥٨١ ٥٨٢ ٥٨٣ ٥٨٤ ٥٨٥ ٥٨٦ ٥٨٧ ٥٨٨ ٥٨٩ ٥٩٠ ٥٩١ ٥٩٢ ٥٩٣ ٥٩٤ ٥٩٥ ٥٩٦ ٥٩٧ ٥٩٨ ٥٩٩ ٦٠٠ ٦٠١ ٦٠٢ ٦٠٣ ٦٠٤ ٦٠٥ ٦٠٦ ٦٠٧ ٦٠٨ ٦٠٩ ٦١٠ ٦١١ ٦١٢ ٦١٣ ٦١٤ ٦١٥ ٦١٦ ٦١٧ ٦١٨ ٦١٩ ٦٢٠ ٦٢١ ٦٢٢ ٦٢٣ ٦٢٤ ٦٢٥ ٦٢٦ ٦٢٧ ٦٢٨ ٦٢٩ ٦٣٠ ٦٣١ ٦٣٢ ٦٣٣ ٦٣٤ ٦٣٥ ٦٣٦ ٦٣٧ ٦٣٨ ٦٣٩ ٦٤٠ ٦٤١ ٦٤٢ ٦٤٣ ٦٤٤ ٦٤٥ ٦٤٦ ٦٤٧ ٦٤٨ ٦٤٩ ٦٥٠ ٦٥١ ٦٥٢ ٦٥٣ ٦٥٤ ٦٥٥ ٦٥٦ ٦٥٧ ٦٥٨ ٦٥٩ ٦٦٠ ٦٦١ ٦٦٢ ٦٦٣ ٦٦٤ ٦٦٥ ٦٦٦ ٦٦٧ ٦٦٨ ٦٦٩ ٦٧٠ ٦٧١ ٦٧٢ ٦٧٣ ٦٧٤ ٦٧٥ ٦٧٦ ٦٧٧ ٦٧٨ ٦٧٩ ٦٨٠ ٦٨١ ٦٨٢ ٦٨٣ ٦٨٤ ٦٨٥ ٦٨٦ ٦٨٧ ٦٨٨ ٦٨٩ ٦٩٠ ٦٩١ ٦٩٢ ٦٩٣ ٦٩٤ ٦٩٥ ٦٩٦ ٦٩٧ ٦٩٨ ٦٩٩ ٧٠٠ ٧٠١ ٧٠٢ ٧٠٣ ٧٠٤ ٧٠٥ ٧٠٦ ٧٠٧ ٧٠٨ ٧٠٩ ٧١٠ ٧١١ ٧١٢ ٧١٣ ٧١٤ ٧١٥ ٧١٦ ٧١٧ ٧١٨ ٧١٩ ٧٢٠ ٧٢١ ٧٢٢ ٧٢٣ ٧٢٤ ٧٢٥ ٧٢٦ ٧٢٧ ٧٢٨ ٧٢٩ ٧٣٠ ٧٣١ ٧٣٢ ٧٣٣ ٧٣٤ ٧٣٥ ٧٣٦ ٧٣٧ ٧٣٨ ٧٣٩ ٧٤٠ ٧٤١ ٧٤٢ ٧٤٣ ٧٤٤ ٧٤٥ ٧٤٦ ٧٤٧ ٧٤٨ ٧٤٩ ٧٥٠ ٧٥١ ٧٥٢ ٧٥٣ ٧٥٤ ٧٥٥ ٧٥٦ ٧٥٧ ٧٥٨ ٧٥٩ ٧٦٠ ٧٦١ ٧٦٢ ٧٦٣ ٧٦٤ ٧٦٥ ٧٦٦ ٧٦٧ ٧٦٨ ٧٦٩ ٧٧٠ ٧٧١ ٧٧٢ ٧٧٣ ٧٧٤ ٧٧٥ ٧٧٦ ٧٧٧ ٧٧٨ ٧٧٩ ٧٨٠ ٧٨١ ٧٨٢ ٧٨٣ ٧٨٤ ٧٨٥ ٧٨٦ ٧٨٧ ٧٨٨ ٧٨٩ ٧٩٠ ٧٩١ ٧٩٢ ٧٩٣ ٧٩٤ ٧٩٥ ٧٩٦ ٧٩٧ ٧٩٨ ٧٩٩ ٨٠٠ ٨٠١ ٨٠٢ ٨٠٣ ٨٠٤ ٨٠٥ ٨٠٦ ٨٠٧ ٨٠٨ ٨٠٩ ٨١٠ ٨١١ ٨١٢ ٨١٣ ٨١٤ ٨١٥ ٨١٦ ٨١٧ ٨١٨ ٨١٩ ٨٢٠ ٨٢١ ٨٢٢ ٨٢٣ ٨٢٤ ٨٢٥ ٨٢٦ ٨٢٧ ٨٢٨ ٨٢٩ ٨٣٠ ٨٣١ ٨٣٢ ٨٣٣ ٨٣٤ ٨٣٥ ٨٣٦ ٨٣٧ ٨٣٨ ٨٣٩ ٨٤٠ ٨٤١ ٨٤٢ ٨٤٣ ٨٤٤ ٨٤٥ ٨٤٦ ٨٤٧ ٨٤٨ ٨٤٩ ٨٥٠ ٨٥١ ٨٥٢ ٨٥٣ ٨٥٤ ٨٥٥ ٨٥٦ ٨٥٧ ٨٥٨ ٨٥٩ ٨٦٠ ٨٦١ ٨٦٢ ٨٦٣ ٨٦٤ ٨٦٥ ٨٦٦ ٨٦٧ ٨٦٨ ٨٦٩ ٨٧٠ ٨٧١ ٨٧٢ ٨٧٣ ٨٧٤ ٨٧٥ ٨٧٦ ٨٧٧ ٨٧٨ ٨٧٩ ٨٨٠ ٨٨١ ٨٨٢ ٨٨٣ ٨٨٤ ٨٨٥ ٨٨٦ ٨٨٧ ٨٨٨ ٨٨٩ ٨٩٠ ٨٩١ ٨٩٢ ٨٩٣ ٨٩٤ ٨٩٥ ٨٩٦ ٨٩٧ ٨٩٨ ٨٩٩ ٩٠٠ ٩٠١ ٩٠٢ ٩٠٣ ٩٠٤ ٩٠٥ ٩٠٦ ٩٠٧ ٩٠٨ ٩٠٩ ٩١٠ ٩١١ ٩١٢ ٩١٣ ٩١٤ ٩١٥ ٩١٦ ٩١٧ ٩١٨ ٩١٩ ٩٢٠ ٩٢١ ٩٢٢ ٩٢٣ ٩٢٤ ٩٢٥ ٩٢٦ ٩٢٧ ٩٢٨ ٩٢٩ ٩٣٠ ٩٣١ ٩٣٢ ٩٣٣ ٩٣٤ ٩٣٥ ٩٣٦ ٩٣٧ ٩٣٨ ٩٣٩ ٩٤٠ ٩٤١ ٩٤٢ ٩٤٣ ٩٤٤ ٩٤٥ ٩٤٦ ٩٤٧ ٩٤٨ ٩٤٩ ٩٥٠ ٩٥١ ٩٥٢ ٩٥٣ ٩٥٤ ٩٥٥ ٩٥٦ ٩٥٧ ٩٥٨ ٩٥٩ ٩٦٠ ٩٦١ ٩٦٢ ٩٦٣ ٩٦٤ ٩٦٥ ٩٦٦ ٩٦٧ ٩٦٨ ٩٦٩ ٩٧٠ ٩٧١ ٩٧٢ ٩٧٣ ٩٧٤ ٩٧٥ ٩٧٦ ٩٧٧ ٩٧٨ ٩٧٩ ٩٨٠ ٩٨١ ٩٨٢ ٩٨٣ ٩٨٤ ٩٨٥ ٩٨٦ ٩٨٧ ٩٨٨ ٩٨٩ ٩٩٠ ٩٩١ ٩٩٢ ٩٩٣ ٩٩٤ ٩٩٥ ٩٩٦ ٩٩٧ ٩٩٨ ٩٩٩ ١٠٠٠ ١٠٠١ ١٠٠٢ ١٠٠٣ ١٠٠٤ ١٠٠٥ ١٠٠٦ ١٠٠٧ ١٠٠٨ ١٠٠٩ ١٠١٠ ١٠١١ ١٠١٢ ١٠١٣ ١٠١٤ ١٠١٥ ١٠١٦ ١٠١٧ ١٠١٨ ١٠١٩ ١٠٢٠ ١٠٢١ ١٠٢٢ ١٠٢٣ ١٠٢٤ ١٠٢٥ ١٠٢٦ ١٠٢٧ ١٠٢٨ ١٠٢٩ ١٠٣٠ ١٠٣١ ١٠٣٢ ١٠٣٣ ١٠٣٤ ١٠٣٥ ١٠٣٦ ١٠٣٧ ١٠٣٨ ١٠٣٩ ١٠٤٠ ١٠٤١ ١٠٤٢ ١٠٤٣ ١٠٤٤ ١٠٤٥ ١٠٤٦ ١٠٤٧ ١٠٤٨ ١٠٤٩ ١٠٥٠ ١٠٥١ ١٠٥٢ ١٠٥٣ ١٠٥٤ ١٠٥٥ ١٠٥٦ ١٠٥٧ ١٠٥٨ ١٠٥٩ ١٠٦٠ ١٠٦١ ١٠٦٢ ١٠٦٣ ١٠٦٤ ١٠٦٥ ١٠٦٦ ١٠٦٧ ١٠٦٨ ١٠٦٩ ١٠٧٠ ١٠٧١ ١٠٧٢ ١٠٧٣ ١٠٧٤ ١٠٧٥ ١٠٧٦ ١٠٧٧ ١٠٧٨ ١٠٧٩ ١٠٨٠ ١٠٨١ ١٠٨٢ ١٠٨٣ ١٠٨٤ ١٠٨٥ ١٠٨٦ ١٠٨٧ ١٠٨٨ ١٠٨٩ ١٠٩٠ ١٠٩١ ١٠٩٢ ١٠٩٣ ١٠٩٤ ١٠٩٥ ١٠٩٦ ١٠٩٧ ١٠٩٨ ١٠٩٩ ١١٠٠ ١١٠١ ١١٠٢ ١١٠٣ ١١٠٤ ١١٠٥ ١١٠٦ ١١٠٧ ١١٠٨ ١١٠٩ ١١١٠ ١١١١ ١١١٢ ١١١٣ ١١١٤ ١١١٥ ١١١٦ ١١١٧ ١١١٨ ١١١٩ ١١٢٠ ١١٢١ ١١٢٢ ١١٢٣ ١١٢٤ ١١٢٥ ١١٢٦ ١١٢٧ ١١٢٨ ١١٢٩ ١١٣٠ ١١٣١ ١١٣٢ ١١٣٣ ١١٣٤ ١١٣٥ ١١٣٦ ١١٣٧ ١١٣٨ ١١٣٩ ١١٤٠ ١١٤١ ١١٤٢ ١١٤٣ ١١٤٤ ١١٤٥ ١١٤٦ ١١٤٧ ١١٤٨ ١١٤٩ ١١٥٠ ١١٥١ ١١٥٢ ١١٥٣ ١١٥٤ ١١٥٥ ١١٥٦ ١١٥٧ ١١٥٨ ١١٥٩ ١١٦٠ ١١٦١ ١١٦٢ ١١٦٣ ١١٦٤ ١١٦٥ ١١٦٦ ١١٦٧ ١١٦٨ ١١٦٩ ١١٧٠ ١١٧١ ١١٧٢ ١١٧٣ ١١٧٤ ١١٧٥ ١١٧٦ ١١٧٧ ١١٧٨ ١١٧٩ ١١٨٠ ١١٨١ ١١٨٢ ١١٨٣ ١١٨٤ ١١٨٥ ١١٨٦ ١١٨٧ ١١٨٨ ١١٨٩ ١١٩٠ ١١٩١ ١١٩٢ ١١٩٣ ١١٩٤ ١١٩٥ ١١٩٦ ١١٩٧ ١١٩٨ ١١٩٩ ١٢٠٠ ١٢٠١ ١٢٠٢ ١٢٠٣ ١٢٠٤ ١٢٠٥ ١٢٠٦ ١٢٠٧ ١٢٠٨ ١٢٠٩ ١٢١٠ ١٢١١ ١٢١٢ ١٢١٣ ١٢١٤ ١٢١٥ ١٢١٦ ١٢١٧ ١٢١٨ ١٢١٩ ١٢٢٠ ١٢٢١ ١٢٢٢ ١٢٢٣ ١٢٢٤ ١٢٢٥ ١٢٢٦ ١٢٢٧ ١٢٢٨ ١٢٢٩ ١٢٣٠ ١٢٣١ ١٢٣٢ ١٢٣٣ ١٢٣٤ ١٢٣٥ ١٢٣٦ ١٢٣٧ ١٢٣٨ ١٢٣٩ ١٢٤٠ ١٢٤١ ١٢٤٢ ١٢٤٣ ١٢٤٤ ١٢٤٥ ١٢٤٦ ١٢٤٧ ١٢٤٨ ١٢٤٩ ١٢٥٠ ١٢٥١ ١٢٥٢ ١٢٥٣ ١٢٥٤ ١٢٥٥ ١٢٥٦ ١٢٥٧ ١٢٥٨ ١٢٥٩ ١٢٦٠ ١٢٦١ ١٢٦٢ ١٢٦٣ ١٢٦٤ ١٢٦٥ ١٢٦٦ ١٢٦٧ ١٢٦٨ ١٢٦٩ ١٢٧٠ ١٢٧١ ١٢٧٢ ١٢٧٣ ١٢٧٤ ١٢٧٥ ١٢٧٦ ١٢٧٧ ١٢٧٨ ١٢٧٩ ١٢٨٠ ١٢٨١ ١٢٨٢ ١٢٨٣ ١٢٨٤ ١٢٨٥ ١٢٨٦ ١٢٨٧ ١٢٨٨ ١٢٨٩ ١٢٩٠ ١٢٩١ ١٢٩٢ ١٢٩٣ ١٢٩٤ ١٢٩٥ ١٢٩٦ ١٢٩٧ ١٢٩٨ ١٢٩٩ ١٣٠٠ ١٣٠١ ١٣٠٢ ١٣٠٣ ١٣٠٤ ١٣٠٥ ١٣٠٦ ١٣٠٧ ١٣٠٨ ١٣٠٩ ١٣١٠ ١٣١١ ١٣١٢ ١٣١٣ ١٣١٤ ١٣١٥ ١٣١٦ ١٣١٧ ١٣١٨ ١٣١٩ ١٣٢٠ ١٣٢١ ١٣٢٢ ١٣٢٣ ١٣٢٤ ١٣٢٥ ١٣٢٦ ١٣٢٧ ١٣٢٨ ١٣٢٩ ١٣٣٠ ١٣٣١ ١٣٣٢ ١٣٣٣ ١٣٣٤ ١٣٣٥ ١٣٣٦ ١٣٣٧ ١٣٣٨ ١٣٣٩ ١٣٤٠ ١٣٤١ ١٣٤٢ ١٣٤٣ ١٣٤٤ ١٣٤٥ ١٣٤٦ ١٣٤٧ ١٣٤٨ ١٣٤٩ ١٣٥٠ ١٣٥١ ١٣٥٢ ١٣٥٣ ١٣٥٤ ١٣٥٥ ١٣٥٦ ١٣٥٧ ١٣٥٨ ١٣٥٩ ١٣٦٠ ١٣٦١ ١٣٦٢ ١٣٦٣ ١٣٦٤ ١٣٦٥ ١٣٦٦ ١٣٦٧ ١٣٦٨ ١٣٦٩ ١٣٧٠ ١٣٧١ ١٣٧٢ ١٣٧٣ ١٣٧٤ ١٣٧٥ ١٣٧٦ ١٣٧٧ ١٣٧٨ ١٣٧٩ ١٣٨٠ ١٣٨١ ١٣٨٢ ١٣٨٣ ١٣٨٤ ١٣٨٥ ١٣٨٦ ١٣٨٧ ١٣٨٨ ١٣٨٩ ١٣٩٠ ١٣٩١ ١٣٩٢ ١٣٩٣ ١٣٩٤ ١٣٩٥ ١٣٩٦ ١٣٩٧ ١٣٩٨ ١٣٩٩ ١٤٠٠ ١٤٠١ ١٤٠٢ ١٤٠٣ ١٤٠٤ ١٤٠٥ ١٤٠٦ ١٤٠٧ ١٤٠٨ ١٤٠٩ ١٤١٠ ١٤١١ ١٤١٢ ١٤١٣ ١٤١٤ ١٤١٥ ١٤١٦ ١٤١٧ ١٤١٨ ١٤١٩ ١٤٢٠ ١٤٢١ ١٤٢٢ ١٤٢٣ ١٤٢٤ ١٤٢٥ ١٤٢٦ ١٤٢٧ ١٤٢٨ ١٤٢٩ ١٤٣٠ ١٤٣١ ١٤٣٢ ١٤٣٣ ١٤٣٤ ١٤٣٥ ١٤٣٦ ١٤٣٧ ١٤٣٨ ١٤٣٩ ١٤٤٠ ١٤٤١ ١٤٤٢ ١٤٤٣ ١٤٤٤ ١٤٤٥ ١٤٤٦ ١٤٤٧ ١٤٤٨ ١٤٤٩ ١٤٥٠ ١٤٥١ ١٤٥٢ ١٤٥٣ ١٤٥٤ ١٤٥٥ ١٤٥٦ ١٤٥٧ ١٤٥٨ ١٤٥٩ ١٤٦٠ ١٤٦١ ١٤٦٢ ١٤٦٣ ١٤٦٤ ١٤٦٥ ١٤٦٦ ١٤٦٧ ١٤٦٨ ١٤٦٩ ١٤٧٠ ١٤٧١ ١٤٧٢ ١٤٧٣ ١٤٧٤ ١٤٧٥ ١٤٧٦ ١٤٧٧ ١٤٧٨ ١٤٧٩ ١٤٨٠ ١٤٨١ ١٤٨٢ ١٤٨٣ ١٤٨٤ ١٤٨٥ ١٤٨٦ ١٤٨٧ ١٤٨٨ ١٤٨٩ ١٤٩٠ ١٤٩١ ١٤٩٢ ١٤٩٣ ١٤٩٤ ١٤٩٥ ١٤٩٦ ١٤٩٧ ١٤٩٨ ١٤٩٩ ١٥٠٠ ١٥٠١ ١٥٠٢ ١٥٠٣ ١٥٠٤ ١٥٠٥ ١٥٠٦ ١٥٠٧ ١٥٠٨ ١٥٠٩ ١٥١٠ ١٥١١ ١٥١٢ ١٥١٣ ١٥١٤ ١٥١٥ ١٥١٦ ١٥١٧ ١٥١٨ ١٥١٩ ١٥٢٠ ١٥٢١ ١٥٢٢ ١٥٢٣ ١٥٢٤ ١٥٢٥ ١٥٢٦ ١٥٢٧ ١٥٢٨ ١٥٢٩ ١٥٣٠ ١٥٣١ ١٥٣٢ ١٥٣٣ ١٥٣٤ ١٥٣٥ ١٥٣٦ ١٥٣٧ ١٥٣٨ ١٥٣٩ ١٥٤٠ ١٥٤١ ١٥٤٢ ١٥٤٣ ١٥٤٤ ١٥٤٥ ١٥٤٦ ١٥٤٧ ١٥٤٨ ١٥٤٩ ١٥٥٠ ١٥٥١ ١٥٥٢ ١٥٥٣ ١٥٥٤ ١٥٥٥ ١٥٥٦ ١٥٥٧ ١٥٥٨ ١٥٥٩ ١٥٦٠ ١٥٦١ ١٥٦٢ ١٥٦٣ ١٥٦٤ ١٥٦٥ ١٥٦٦ ١٥٦٧ ١٥٦٨ ١٥٦٩ ١٥٧٠ ١٥٧١ ١٥٧٢ ١٥٧٣ ١٥٧٤ ١٥٧٥ ١٥٧٦ ١٥٧٧ ١٥٧٨ ١٥٧٩ ١٥٨٠ ١٥٨١ ١٥٨٢ ١٥٨٣ ١٥٨٤ ١٥٨٥ ١٥٨٦ ١٥٨٧ ١٥٨٨ ١٥٨٩ ١٥٩٠ ١٥٩١ ١٥٩٢ ١٥٩٣ ١٥٩٤ ١٥٩٥ ١٥٩٦ ١٥٩٧ ١٥٩٨ ١٥٩٩ ١٦٠٠ ١٦٠١ ١٦٠٢ ١٦٠٣ ١٦٠٤ ١٦٠٥ ١٦٠٦ ١٦٠٧ ١٦٠٨ ١٦٠٩ ١٦١٠ ١٦١١ ١٦١٢ ١٦١٣ ١٦١٤ ١٦١٥ ١٦١٦ ١٦١٧ ١٦١٨ ١٦١٩ ١٦٢٠ ١٦٢١ ١٦٢٢ ١٦٢٣ ١٦٢٤ ١٦٢٥ ١٦٢٦ ١٦٢٧ ١٦٢٨ ١٦٢٩ ١٦٣٠ ١٦٣١ ١٦٣٢ ١٦٣٣ ١٦٣٤ ١٦٣٥ ١٦٣٦ ١٦٣٧ ١٦٣٨ ١٦٣٩

- 5: اننى³⁰⁾ لما رايت³¹⁾ عقل بهاي³²⁾ الدين قراقوش محزمة فاشوش قد اتلف الامة والله يريح³³⁾
 6: عنهم كل غمة لا يقتدى بعالم ولا يعرف المظلوم من الظالم وما فى قلبه
 7: شى من الحنة³⁴⁾ والشكية عنده لمن سبق ولا يهتدى لمن صدق ولا يقدر احد
 8: من عظم منزلته على ان يرد كلمته ويشتط³⁵⁾ اشتياط الشيطان ويحكم حكما
 9: ما انزل الله به³⁶⁾ من سلطان فصنفت هذا الكتاب لصالح الدين³⁷⁾ عسى يريح
 10: منه المسلمين وكان قراقوش رجلا صقليليا³⁸⁾ يميل الى البيضان ويغض
 11: السودان فالله المستعان وعليه التكلان
 12: حكاية

[170r]

- 1: فاول حكوماته³⁹⁾ ان امراة حجازية لها جارية تركية قالت لقراقوش ان هذه
 2: جاريتى قد اسات⁴⁰⁾ الادب على قال⁴¹⁾ فنظر قراقوش الى بياض الجارية
 3: التركية وسواد الحجازية فقال للحجازية والك⁴²⁾ خلق⁴³⁾ الله جارية تركية
 4: لجارية سودا⁴⁴⁾ حجازية ما انا مطغوم ولا مدوخ يا غلمان ودوا⁴⁵⁾ هذه
 5: الحجازية الحجز⁴⁶⁾ قال فمكثت شهرا وبعثت اليه الحجازية انى⁴⁷⁾ قد عتقتها
 6: لوجه الله تعالى فقال هذا محال حتى⁴⁸⁾ تعتقكى⁴⁹⁾ فانك جاريتها وان ارادت

30) ハムザ版には1-4行の文言がなく、この語からの引用がある。

31) ハムザ版では رأيت。なお、ハムザ版は多くのハムザを補っているが、それを全て指摘すると膨大な数になるため、以降は特に必要な場合に限って言及することにする。

32) 「バハーウ」はカサノヴァ版では بها もしくは بها、ハムザ版では بهاء と表記されている。本写本ではこの固有名詞における語末の単独ハムザがすべて ى に置き換えられている。

33) ハムザ版では يكشف。

34) ハムザ版には وما فى قلبه شى من الحنة و の文言がない。

35) カサノヴァ版では يشتط。ハムザ版では يشتط であるが、ハムザは 次の動名詞との関連から يشتط の方が正しいと述べている (Hamza 1982: 54)。ただし、يشتط でも解釈は可能である。

36) カサノヴァ版にはこの語がない。

37) カサノヴァ版では الذى となっているが、これがサラーフツディーンの名前の一部であることは明らかである。

38) ハムザ版では صقليل (シチリア人) となっている。ب を書き落としたものと思われる。

39) カサノヴァ版では حكومته となっていて明らかな綴り間違いである。ハムザ版では単数形 حكومه が用いられている。

40) カサノヴァ版では أسأت、ハムザ版では أسأت。

41) 本写本およびカサノヴァ版には、話の進行とは関係のない قال がしばしば挿入されている。これは、「語り手は言った」を表す。カサノヴァ版の仏語訳ではこの部分が省略されているが、本稿の日本語訳では省略せず [] の中に入れた。ハムザ版にはこの種の قال が一切書かれていない。数が多いため、これ以降該当箇所の指摘は控える。

42) 「汝に呪いあれ」を意味する。カサノヴァ版、ハムザ版では وملك。なおマフディ版『千夜一夜物語』(14世紀頃の写本校訂) には同種の綴りが見られる (Mahdi 1984: 116 に والك など)。

43) ハムザ版では疑問詞が付き、أ خلق となっている。

44) ハムザ版では سوداء。

45) ودى (wadda)〈連れて行く〉の命令形 (Spiro 1895: 636-637, Badawi and Hinds 1986: 931)。ハムザは、現在も用いられているエジプト方言であると述べている (Hamza 1982: 55)。

46) カサノヴァ版、ハムザ版では حجرة。本写本でも、حجرة と読むことは可能である。

47) カサノヴァ版、ハムザ版では اننى。

48) カサノヴァ版では هذا الحال حتى、ハムザ版では هذا الحال متى。

49) 本写本では、2人称女性単数の接尾代名詞がしばしば كى と書かれている。カサノヴァ版、ハムザ版では ك。

- 7: بيعكي فتبيعيكي⁵⁰⁾ او⁵¹⁾ عتقك تعتقك فقالت الحجازية للتركية اعملي معي
8: مثل ما عملت معكي فقالت وما تريدني مني⁵²⁾ فقالت التركية انني قد عتقت
9: سيدتي الحجازية فقال قراقوش جزاك الله خيرا
10: حكاية
11: قال واتاه ثلاثة انفس احدهم اجرود⁵³⁾ سناط⁵⁴⁾ والاثنين⁵⁵⁾ كبار⁵⁶⁾ اللحا⁵⁷⁾ وقد نتف⁵⁸⁾
12: الامر⁵⁹⁾ الاجرود دقونهما فقال الرجل⁶⁰⁾ يا مولانا بهاي الدين خد⁶¹⁾ لنا حقنا
13: من هذا فقد نتف دقوننا⁶²⁾ وخرق ثيابنا قال فنظر قراقوش إلى الاجرود
14: السناط وقال⁶³⁾ والك⁶⁴⁾ نتفتم دقن هذا الصبي وجيتم⁶⁵⁾ تشكوه⁶⁶⁾ ودوهما الى
15: الحبس ولا تخرجوهما حتى تطلع دقن هذا الصبي
16: حكاية

[170v]

- 1: قيل⁶⁷⁾ ان امرأة اتته بولدها فقالت يا سيدي ان ولدي يشتمني قال
2: فامر بحبسه سنة قال فلم ياخذ امه تلك الليلة نوم قال فاصبحت⁶⁸⁾
3: راحت⁶⁹⁾ الى عند⁷⁰⁾ السجانين وقالت ما الحيلة في خلاص ولدي من هذا
4: الحبس فقالوا⁷¹⁾ هاتي حلاوتنا ونعرفك ايش⁷²⁾ تقولين للامير

50) ハムザ版では فتبيعيك とあるが、明らかな綴り間違いである。

51) ハムザ版ではここに وان أرادت が挿入されている。

52) カサノヴァ版、ハムザ版ではこの後に فقالت الحجازية أن تعتقيني (すると、ヒジャーズの女が「あなたが私を解放することです」と言った。) という文が入る。こちらの方が話の流れとして自然であるため、本写本では書き落としがあったものと思われる。

53) اجرود (ʾajrūd) は、エジプト方言で〈髭がない〉の意 (Spiro 1895: 98, Badawi and Hinds 1986: 154)。シリア地域では ʾajrūdī が用いられる (Barthélemy 1935: 108)。

54) ハムザの脚注によれば、「頬に髭のない、すなわちまったく髭がないか、顎だけで頬には髭がない」の意 (Hamza 1982: 56)。Spiro (1895), Badawi and Hinds (1986) には記載がない。

55) この語は主格をとるため、CA では الأثنان とすべきところである。

56) 主語に一致する双数形ではなく、複数形が用いられている。

57) ハムザ版では اللحي。本写本では، ي (ʾalif maqṣūra) が ا (ʾalif) で書かれる場合がある。

58) カサノヴァ版では نتف。本写本でも語末に ت らしきものは見えるが、意味的には نتف。

59) 〈髭がない〉の意で、اجرود と同意語。カサノヴァ版、ハムザ版にはこの語はない。

60) カサノヴァ版、ハムザ版では الرجال。

61) カサノヴァ版、ハムザ版では خذ。両テキストにおいて、CA の ذ が د で表記されていることは稀であるため、以降は ذ に対応する د が確認された場合のみ指摘する。

62) カサノヴァ版でも、この箇所の دقوننا と [170r: 14, 15] の دقن において、ذ の代わりに د が使われている。ハムザ版の同箇所はすべて ذ である。

63) カサノヴァ版では قال。

64) 男性2人を複数形の代名詞で受けている。この行には、双数に対する複数形使用が4例ある。

65) カサノヴァ版、ハムザ版では جئتم。本写本では، ي (yā を支えとする hamza) が ي (yā) で表記されている。本写本に現れる جاء 〈来る〉は、どの活用形でもハムザが消失している。

66) 2人称男性複数の語尾の ن が欠落している。ハムザ版では تشكوه。

67) ハムザ版では وقيل。

68) ハムザ版では فلما أصبحت。

69) イブン・マンマーティー系テキストでは、〈行く〉に対して راح (rāh) がよく使われる。現代エジプト方言と共通する語彙である。

70) ハムザ版にこの語はない。

71) ハムザ版では فقالوا لها。

72) 疑問詞 أي شيء (ʾay šayʾ) 〈何〉は、現代のカイロ方言でも用いられるが、主に諺

- 5: بهای الدين قراقوش قال فدفعت لهم⁷³⁾ الفضة وقالوا⁷⁴⁾ روحى
 6: الساعة الى الامير وقولى له يا سيدى انا الامراة الذى⁷⁵⁾ حبيست
 7: لى ولدى الى⁷⁶⁾ سنة وقد انقضت السنة فاخرج لى ولدى فاتت⁷⁷⁾
 8: الى الامير قراقوش وقالت له ذلك فقال لها روحى بلا محال فقد بقا⁷⁸⁾ له
 9: من السنة سبعة ايام من سوى امس واغدا⁷⁹⁾ قال فمضت⁸⁰⁾ واعلمت
 10: السجانين فقالوا⁸¹⁾ هذه نعمة فاذا كان اغدا روحى اليه وقولى له
 11: قد انقضت السبعة ايام قال⁸²⁾ فاصبحت جاته⁸³⁾ فلما نظر اليها قال [يا مراة (؟)]
 12: حتى تغرب الشمس يا غلام اذا⁸⁴⁾ غربت الشمس فاطلق لها ولدها
 13: من الحبس ولا ترجعنى تجيبه⁸⁵⁾ حبسوا⁸⁶⁾ سنتين⁸⁷⁾ فقالت انت فى حل
 14: من هذا البله⁸⁸⁾ والسلام

[171r]

- 1: حكاية
 2: قال وسابق⁸⁹⁾ رجلا بفرس له فسيقه الرجل بفرسه فحلف انه لا تعلقه
 3: ثلاثة ايام فقال له السابق يا مولاي يموت الفرس⁹⁰⁾ فقال
 4: له⁹¹⁾ احلف لى انك اذا علفته يا هذا لا تعلمه انى دريت بذلك
 5: حكاية
 6: قال⁹²⁾ واتوه بغلام له ركبدار وقد قتل فقال اشنقوه ثم قالوا⁹³⁾ له⁹⁴⁾ انه

や定型句での使用にとどまり、一般的な疑問詞としては ايه (ʾēh) を多用する。

- 73) ハムザ版では اليهم。
 74) ハムザ版では وقالوا لها。
 75) 限定名詞が関係節によって修飾されているが、その関係節を導く関係代名詞に、先行詞と一致しない男性単数形 الذي が用いられている。一方、カサノヴァ版には امرأة التى حبيست とあり、不定名詞に対する関係節に關係代名詞が使用されるという別の逸脱が見られる。ハムザ版は امرأة حبيست と、文法的に正しい。
 76) カサノヴァ版、ハムザ版にこの語はない。
 77) ハムザ版では فأنت المرأة。
 78) カサノヴァ版、ハムザ版では بقى。
 79) カサノヴァ版、ハムザ版では غدا ([170v: 10] にも同様の例)。本写本の اغدا という形式は、現代エジプト方言では使用されないが、2-3c.A.H. のパピルス文書に例がある (Hopkins 1984: 7)。またこの語は前置詞の支配下にもかかわらず、対格 tanwīn の ʾalif を保持している。
 80) ハムザ版では فمضت المرأة。
 81) ハムザ版では فقالوا لها。
 82) カサノヴァ版 (、ハムザ版) にこの語はない。
 83) ハムザ版では فأصبحت المرأة وجاءته。
 84) カサノヴァ版、ハムザ版では فاذا。
 85) 85) جاء بـ (jāʾa bi) 〈もってくる、連れてくる〉の未完了形。
 86) カサノヴァ版では أحبسوه、ハムザ版では أو يحبسوه。
 87) ハムザ版ではこの後、! الخ... で終わっている。
 88) カサノヴァ版では البلد。本写本でもその可能性がある。
 89) ハムザ版では話の冒頭が وقيل انه سابق で始まっている。
 90) カサノヴァ版、ハムザ版にこの語はない。
 91) ハムザ版ではここに قراقوش が挿入されている。
 92) ハムザ版では قيل。
 93) ハムザ版では ثم قالوا の代わりに فقيل。
 94) カサノヴァ版にこの語はない。

- 7: حدادك وينعل لك الفرس فان شنته انقطعت منه قال فنظر قراقوش
- 8: قبالة بابه لرجل قفاص فقال ما⁹⁵⁾ لنا بهذا القفاص حاجة فلما اتوه
- 9: به قال اشنقوا القفاص وسيبوا⁹⁶⁾ الركبدار الحداد الذي ينعل لنا الفرس
- 10: حكاية⁹⁷⁾
- 11: قال واتوه بلص ومعه كارة قماش فقال لهم والكم جيتم تكذبون
- 12: على هذا الغريب انفوه بها من البلد ولا تقطعون⁹⁸⁾ نضايقي⁹⁹⁾ لص غريب¹⁰⁰⁾
- 13: حكاية
- 14: قال وتوقف النيل بمصر اياما فنظر الى جمال السقاين
- 15: عشرين عشرين جملا¹⁰¹⁾ قال فتفكر¹⁰²⁾ عند ذلك وقال فانا اقول¹⁰³⁾ الما

[171v]

- 1: ما يوفى من هذه الافات¹⁰⁴⁾ يا غلمان نادوا في المدينة قد امر بهاي الدين
- 2: قراقوش لا يملأ احدا¹⁰⁵⁾ من البحر الا جملا واحدا قال ففعلوا ذلك فاوفا¹⁰⁶⁾
- 3: النيل فقال لهم يا هولاء الويل لكم ان عدمتموني فكيف رايتم
- 4: راى عليكم فما هو الا رأى مبارك
- 5: حكاية
- 6: قال ومدحه رجل بقصيدة وانشدتها بصوت طيب فقال له قراقوش
- 7: يا مقرى لقد قرأت¹⁰⁷⁾ طيبا¹⁰⁸⁾ وانا¹⁰⁹⁾ اريد ان اخز هذه القصيدة على
- 8: دراعى¹¹⁰⁾ فانت مدحتنا ونحن دعونا لك فجزاك الله عنا خيرا فقال
- 9: الشاعر وانت فلا جزاك الله عنا خيرا فقال بهاي الدين
- 10: يا هذا كاني اراك جايعا اعطوه مائة اردب قمح قال فاخذها الشاعر
- 11: وانصرف حكاية
- 12: قال وحكى انه بات ليلة عند قاضى المطرية فاخرج له قراقوش وزيتون
- 13: فقال له قراقوش اذا¹¹¹⁾ كان في غداة غد فتعال الينا القاهرة

95) カサノヴァ版にこの語はない。ハムザ版では ليس。

96) 動詞 ساب は、現代エジプト方言と同様〈離す、自由にする〉という意味で使用されている。

97) ハムザ版にこの話は含まれていない。

98) 否定命令であれば لا يقطعوا とすべきところである。要求法でなく、直説法が使われている。

99) カサノヴァ版では (?) نضايقي と語が特定されていない。

100) 動詞の目的語（不定名詞句）であるが、対格を示す tanwīn の 'alif が表記されていない。

101) カサノヴァ版では عشرين وعشرين جملا、ハムザ版では عشرين وعشرين。前者では、20という数詞に対して CA の規則とは異なる複数対格名詞が後置されている。

102) ハムザ版では تفكر。

103) カサノヴァ版、ハムザ版では نقول。

104) カサノヴァ版では هذا الافات、ハムザ版では هذا الافات。

105) カサノヴァ版、ハムザ版では احد。ここでは主格が文法的に正しい。

106) カサノヴァ版、ハムザ版では فاوفى。

107) カサノヴァ版では قرأت。

108) カサノヴァ版、ハムザ版には طيب とあり、副詞的対格を示す tanwīn の 'alif が省略されている。

109) この話には、動詞に先行する人称代名詞が4例現れる。口語の特徴といえる。

110) カサノヴァ版では زراعى としており、この部分は訳していない。

111) カサノヴァ版、ハムザ版では ان。

- 14: قال فلما اصبح ركب القاضي¹¹²⁾ حجرة¹¹³⁾ له واتا¹¹⁴⁾ الى قراقوش يسلم عليه
 15: قال فابصر حصان قراقوش الحجرة¹¹⁵⁾ فشب¹¹⁶⁾ فتقطب قراقوش فحصل له
 16: بذلك تشويش قال¹¹⁷⁾ فحط القاضي في الحبس سنة ثم اخرجته واستخدمه

[172r]

- 1: على الاهرا¹¹⁸⁾ فمكث سنة في اطييب عيش فاتاه وقت الغل¹¹⁹⁾
 2: فسلم¹²⁰⁾ عليه فقال له قراقوش اعمل لي¹²¹⁾ حساب القمح والشعير والفلو¹²²⁾
 3: والحمص فكتبهم¹²³⁾ في جريدة بالكل واتاه بها فقال له ما هذا خلطت
 4: القمح والشعير والفلو والحمص في جريدة واحدة يا غلمان احبسوه
 5: قال فمكث في الحبس سنة ثانية فدخل الحبس رجل نصراني فتحدث هو
 6: والقاضي قال فعلمه كيف خلاصه فاخذ النصراني منه الجريدة فكتب
 7: بالقمح وحده وبعثه الى قراقوش وبعد شهر فكتب¹²⁴⁾ بجريدة الشعير وحده
 8: وبعد شهر فكتب بجريدة الفلو¹²⁵⁾ وبعد شهر¹²⁶⁾ بجريدة الحمص وحده فلما
 9: حصل الكل عند قراقوش قال لقد تعبت يا فقيه نقيت هذا من هذا
 10: وذا من ذا زفوه المدينة¹²⁷⁾ قال¹²⁸⁾ فزفوه المدينة قال فحلف القاضي
 11: انه لا¹²⁹⁾ يبقى يخدم قراقوش ابدا
 12: حكاية
 13: قال¹³⁰⁾ وجا¹³¹⁾ شاب مضروب فبعث معه خمس رجال¹³²⁾ من الجنادرية قال
 14: فبلغ الخبر الى خصمه¹³³⁾ الظالم فسبقه ووقف بجانب قراقوش

112) ハムザ版ではこの語が أصبح の直後にくる。

113) حجر (hijr) で〈雌馬〉を表すが、本写本およびカサノヴァ版ではともに tā' marbūḡa のついた形が使われている。ハムザ版では مهرة (muḥra) 〈雌馬〉という同義語が使用されている。

114) カサノヴァ版、ハムザ版では اتى 。

115) ハムザ版では المهرة 。

116) カサノヴァ版では شب 。

117) ハムザ版では قيل 。

118) カサノヴァ版、ハムザ版では الاهراء 。

119) カサノヴァ版、ハムザ版では الغلة 。

120) ハムザ版では يسلم 。

121) ハムザ版では لنا 。

122) ハムザ版にこの語はない。

123) ハムザ版ではここに القاضي が挿入されている。

124) ハムザ版では كتب 。

125) ハムザ版ではここに وحده が挿入されている。

126) ハムザ版ではここに كتب が挿入されている。

127) カサノヴァ版、ハムザ版では في المدينة 。

128) ハムザ版では قيل 。

129) カサノヴァ版では ان لا 、ハムザ版では ألا 。

130) ハムザ版では قيل 。

131) カサノヴァ版では جاءه 、ハムザ版では جاء 。

132) CA なら خمسة رجال とすべきである。男性名詞に対して、女性用の数詞が用いられている。

133) カサノヴァ版では行頭以降が فبلغ الى خصمه 、ハムザ版では فبلغ ذلك خصمه となっている。

- 15: فلما اقبل قال¹³⁴⁾ هذا الذى قتلنى وضربنى فبطحه¹³⁵⁾ وضربه الى¹³⁶⁾ اشرف
16: على الموت وهو يقول انا مظلوم فقال¹³⁷⁾ سبقك فحلف اناس¹³⁸⁾

[172v]

- 1: انهم لا يقعدون ما دام قراقوش فى البلاد حاكما
2: حكاية
3: قال¹³⁹⁾ واتوه بمحضر فيه شهادة المسلمين باثبات دار فى خط قصر الشمع قال
4: فنظر عند ذلك الامير بهاي الدين قراقوش فى المحضر وقال يا هولاء¹⁴⁰⁾ [ي(؟)]
5: كملتم¹⁴¹⁾ المحضر بخط ريس اليهود فقالوا لا فقال¹⁴²⁾ هذا كله زور
6: وبهتان ومحال ورما¹⁴³⁾ المحضر من يده
7: حكاية
8: قال واتاه شيخ وصي امرد كل¹⁴⁴⁾ منهما يقول يا مولاي دارى فقال عند ذلك
9: قراقوش للصبي معك كتاب يشهد لك فالدار ما تكون الا للشيخ الكبير
10: يا صبي ادفع له داره واذا صرت فى عمر هذا الشيخ الكبير يا صبي [ادفع¹⁴⁵⁾ لك
11: الدار والسلام¹⁴⁶⁾
12: حكاية
13: قال¹⁴⁷⁾ واتوه بغلام وفى يده ديك فقال يا هذا ان هذا الديك لو نقر
14: عينك لكان يقلعها يا غلمان خذوا منه دية عينه قال فحلف انه لا¹⁴⁸⁾
15: يعقد فى مدينة يكون حاكمها قراقوش ابدا
16: حكاية

[173r]

- 1: قال واتاه رجل نصراني كاتب¹⁴⁹⁾ فخاف ان يدخل بدواته¹⁵⁰⁾ الالبوس السودا
2: فيقول¹⁵¹⁾ صحبتنا بالسواد قال فجعلها فى خرقة فسالت الليقة¹⁵²⁾

134) ハムザ版では فلما أقبل الشاب قال الخصم
135) ハムザ版では فبطحه الأمير
136) カサノヴァ版、ハムザ版では الى ان 。本写本では、必要な接続詞 أن が欠けている。
137) ハムザ版では فقال له قراقوش
138) カサノヴァ版、ハムザ版では الناس
139) ハムザ版では قبل
140) カサノヴァ版では هولاء 、ハムザ版では هؤلاء
141) カサノヴァ版、ハムザ版では اكملتم
142) ハムザ版では قال
143) カサノヴァ版、ハムザ版では رمى
144) カサノヴァ版では كلا
145) カサノヴァ版では فدفع 、ハムザ版では دفع
146) ハムザ版にこの語はない。
147) ハムザ版では قبل
148) カサノヴァ版では فحلف ان لا 、ハムザ版では ألا
149) カサノヴァ版、ハムザ版にこの語はない。
150) ハムザ版では بدوت
151) ハムザ版ではここに الامير が挿入されている。
152) カサノヴァ版では الليعة

- 3: على ساق النصرانى فقال له قراقوش والى¹⁵³⁾ مما تغلط فى دفاتر
4: مولانا السلطان وتلحسهم صارت بدلتك سودا يا غلمان ودوه
5: الى الحبس حتى تبيض بدلته ثم نخلصه¹⁵⁴⁾
6: تم¹⁵⁵⁾ المختار من كتاب الفاشوش فى احكام قراقوش
7: ولله الحمد والمنة¹⁵⁶⁾

<日本語訳>¹⁵⁷⁾

[169r:1-8]

カラークーシュの裁きにおける愚かさの書選集。それは、崇高、偉大かつ優秀な文人であるカーディー、アッ=サイド・ブン・マンマーティーが著したものの一つである。神が彼を赦し給わんことを。我々と彼らすべてを赦し給わんことを。神がお創りになったもつとも高貴なるお方、我らが主ムハンマドと彼の家族、彼の教友たち、彼の一族のために祈れ。

[169v:1-11]

慈悲深く慈愛あつた神の御名において。万有の主たる神に讃えあれ。

神に讃えあれ。神は知性をもつとも貴き道理となされたお方、そしてもつとも立派な精神と呼ばれた人々に名誉を授けたお方、また各々の頭に無知を重くお乗せになったお方である。偉大なる神は言った。「彼らは家畜のようなものにすぎない。いや、道を踏み迷うことがさらにはなはだしいのである。¹⁵⁸⁾」崇高、偉大かつ優秀なるカーディー、アッ=サイド・イブン・マンマーティー ―至高なる神が彼を赦し給わんことを― は言った。「私がバハーウッディーン・カラークーシュの知性が愚かさ結びついているのを目の当たりにした時、彼はすでに人々を破滅へと導いていた ―神が彼らからあらゆる悲しみを取り除き給わんことを―。彼は学者のいうことに従わず、害を与えた者と被った者とを区別することができない。彼の心には同情のかけらもない。彼のもとでは先に訴えた者が勝ちで、真実を語る者には耳を貸さない。しかし、その地位の高さゆえに誰も彼の言葉に異議を唱えることはできない。彼は悪魔のごとくふるまうこと甚だしく、何の根拠もないでたらめな裁きを下す。そこで、私はこの書物をサラフッディーン ―おそらくこの方はムスリムたちをあの男から解放してくださるだろう― のためにまとめた。カラークーシュはスラブ人の男で、白人を好み黒人を嫌っている。神は人から助けを請われるお方であり、頼れるお方である。」

話 [169v:12-170r:9]

彼の最初の裁きは以下のごとくである。トルコ人の女奴隷をもつヒジャーズの女が、カラー

153) カサノヴァ版、ハムザ版では **ويلك** 。

154) カサノヴァ版では **تخلصه** 。

155) カサノヴァ版では **قد تم** 。

156) カサノヴァ版には最後の1行が、ハムザ版には最後の2行がない。

157) 訳出においては、カサノヴァの仏訳、ハムザのテキスト脚注、佐藤の日本語訳（抄訳）も参考にした。内容を明確にするため、適宜原文の代名詞を名詞で表したり、意訳を施している。

158) 写本ではこの部分が上書きされていて判読しにくい。カサノヴァ版からこの箇所はコーラン25章44節からの引用であることが明らかなため、この部分の文言（中央公論社版）を含めた。

クーシュに言った。「これは私の女奴隷です。彼女は私に対して無礼を働きました。」〔彼は言った。〕そこでカラークーシュはトルコの女奴隷の白さとヒジャーズの女の黒さとを眺め、ヒジャーズの女に言った。「何たること（汝に呪いあれ）。神はヒジャーズの黒い女の奴隷として、トルコ人の女奴隷をお創りになったというのか。私は馬鹿でも間抜けでもない。おい奴隷たち、このヒジャーズの女を牢屋へ連れて行け。」〔彼は言った。〕女は一か月過ごした。ヒジャーズの女は彼のもとに「私は神のために彼女を解放します」と伝えた。すると彼は言った。「そのようなことはかの女がお前を解放するまではありえない。お前はかの女の奴隷なのだから。もしかの女がお前を売ることを望むならお前を売るであろうし、お前を解放することを望むならお前を解放するであろう。」そこでヒジャーズの女はトルコ人の女に言った。「私がお前にしてやったことを私にも同じようにしておくれ。」（トルコ人の）女は言った。「あなたは私に何をお望みですか。」¹⁵⁹⁾するとトルコ人の女は言った。「私はヒジャーズの私の女主人を解放します。」カラークーシュは言った。「神がお前に報酬をお授けになりますように。」

話 [170r:10-15]

〔彼は言った。〕3人の男がカラークーシュのところへ来た。そのうちの1人は髭がなく、2人は立派な髭を生やしていた。髭のない男が2人の男の髭を引き抜いたという。そこで（髭のある）男が言った。「我らが主人バハーウッディーン・カラークーシュ様。我々のためにこの男をお裁きください。といいますのも、あいつは我々の髭を引き抜き、我々の服を引き裂いたのでございます。」〔彼は言った。〕カラークーシュはその髭なしの男を見て言った。「何たること。お前たちはこの若者の髭を引き抜いた上に、不平を言いに来てきたのか。2人を牢屋へ連れて行け。この若者の髭が生えるまで外に出してはならぬぞ。」

話 [170r:16-170v:14]

次のように言われた。ある女がカラークーシュのもとに息子を連れてやってきた。その女は言った。「ご主人様。実は息子が私をののしるのでございます。」〔彼は言った。〕すると彼はその息子を一年間投獄するよう命じた。〔彼は言った。〕ところが、その夜彼の母親は眠ることができなかった。〔彼は言った。〕彼女は朝になると看守らのところへ行き、次のように言った。「私の息子をこれから解放してやるためにはどうすればよいのでしょうか。」すると彼らは言った。「我々の満足するもの（心付け）をもってこい。そうすればアミールのバハーウッディーン・カラークーシュ様にどう言えばいいか教えてやろう。」〔彼は言った。〕そこで彼女は彼らに銀を払った。彼らは言った。「今すぐアミールのところへ行き、『ご主人様、私は自分のせいで息子を一年間牢屋暮らしにしまった女でございます。もうその一年が経ちましたので、どうか私の息子を外に出してくださいませ。』と言うのだ。」そこで彼女はアミール・カラークーシュのところへやってきて、そのように言った。するとカラークーシュは彼女に言った。「つべこべ言わずに行け。その一年にはまだ昨日と明日以外にも7日残っておる。」彼女は去って、看守らに知らせた。すると彼らは言った。「これは喜ばしいことだ。明

159) カサノヴァ版、ハムザ版では、ここでヒジャーズの女が「お前が私を解放することです」と述べる。本写本ではこの部分が抜けている。

日になったら、彼のところへ行き、『その7日間が終わりました』と言うのだ。」「彼は言った。」「彼女は朝になると、カラークーシュのところへやってきた。彼は彼女を見て言った。「女よ、太陽が沈むまで（待て）。奴隷たち、太陽が沈んだら彼女の息子を牢屋から解放してやれ。もう息子を連れて戻ってくるでないぞ。でなければ二年間閉じ込めることになる。」すると彼女は言った。「あなた様は何でも思いのままにできるお方でございます。」これでおしまい。

話 [171r:1-4]

〔彼は言った。〕カラークーシュはある男と自分の持ち馬で競争した。その男は彼の馬でカラークーシュに勝った。すると、カラークーシュは3日間その馬には餌をやらないと誓った。勝った男は彼に言った。「我がご主人様、馬が死んでしまいます。」そこでカラークーシュは男に言った。「おいお前。もしお前が馬に餌をやったとしても、私がそれを知っていることを馬に云わないと誓え。」

話 [171r:5-9]

〔彼は言った。〕男たちがカラークーシュの奴隷である馬丁をつれて彼のところへやってきた。その馬丁は殺人を犯していた。そこでカラークーシュは言った。「そいつを絞首刑にしろ。」すると彼らはカラークーシュに言った。「あの男はあなたの鍛冶屋で、あなたのために馬に蹄鉄を打っています。もし彼を絞首刑にすればあなたは彼（蹄鉄を打ってくれる人間）を失ってしまいます。」「彼は言った。』すると、カラークーシュは門の正面にかご職人の男がいるのを見て、言った。「我々はこのかご職人に何の用もない。」そして彼らが職人を連れてくると、カラークーシュは言った。「そのかご職人を絞首刑にせよ。そして私のために馬に蹄鉄を打ってくれる鍛冶屋の馬丁を放してやれ。」

話 [171r:10-12]

〔彼は言った。〕数人の男が布の包みをもった盗人を連れてきた。するとカラークーシュは彼らに言った。「何たること、お前たちはこのよそ者のことで嘘を言いに来たのか。それをもたせまま彼をこの国から送りかえせ。よその国の盗人を困らせるようなことはするな。」

話 [171r:13-171v:4]

〔彼は言った。〕エジプトではナイル川が数日止まってしまった（水量が減った）。カラークーシュは、水売りのラクダが20頭と、20頭と（水を積んで）行くのを目にした。〔彼は言った。〕そしてそれについて考え、こう言った。「私が思うに、これらの被害によって水が増えないのだ。奴隷たち、町でこう呼びかけよ。どの者もラクダ一頭分しか川から（水を）積んではならぬ。パハーウッディーン・カラークーシュ様がそう命ぜられたと。」「彼は言った。〕彼らはこの通りにした。するとナイル川は増水した。カラークーシュは彼らに言った。「この者たち、何たる様だ。もしお前たちに私がいなければ（どうなっていたことか）。お前たちは私が下した提案をどのように心得る。それは神の恵みを受けた名案というほかない。」¹⁶⁰⁾

160) 時期がくればナイル川は増水するのだが、カラークーシュは自分の提案のおかげだと思っている。

話 [171v:5-11]

〔彼は言った。〕ある男がカスィーダ（長詩）でカラークーシュのことを称賛した。そしてそれを見事な声で朗読した。するとカラークーシュは彼に言った。「おい、詩詠みよ。お前は見事に詠んでくれた。私はこの詩を自分の腕に刻みたい（入れ墨したい）と思っておる。お前は私を褒めたたえ、我々はお前を祝福した。神が我々に代わってお前により報酬をお授けになりますよう。」すると詩人は言った。「あなた様におかれましては、神が私どもに代わってよい報酬をお授けになりませぬよう。」¹⁶¹⁾そこで、バハーウディーン・カラークーシュは言った。「おいお前、私にはお前が腹を空かせているように思える。この男に百アルダブの小麦を与えてやれ。」〔彼は言った。〕その詩人はそれを受け取ると、去っていった。

話 [171v:11-172r:11]

〔彼は言った。〕次のように語られた。ある夜、彼はマタリーヤのカーディー（判事）のもとに泊まった。彼は判事のためにカルクーシャ（バスケットのような食べ物）とオリーブを取り出した。そしてカラークーシュは彼に言った。明日朝になったら、カイロにいる我々のところに来い。〔彼は言った。〕そこで、朝になると判事は彼の雌馬に乗り、カラークーシュのところに挨拶にやってきた。〔彼は言った。〕するとカラークーシュの馬がその雌馬に気づき、前足を上げた。カラークーシュは顔をしかめ、またそれによって彼は混乱した。〔彼は言った。〕カラークーシュは判事を1年間牢屋に入れた。それから彼は判事を釈放し、穀倉の仕事に登用した。判事は1年間よい暮らしをして過ごした。彼は収穫の時期にカラークーシュのもとにやってきて、挨拶した。カラークーシュは彼に言った。「私のために小麦と大麦とそら豆とひよこ豆の勘定書を作ってくれ。」そこで彼は一枚の帳簿にそれらを全て書き、彼のところへ持っていった。すると彼は判事に言った。「これは何だ。お前は小麦と大麦とそら豆とひよこ豆を一つの帳簿に混ぜてしまったのか。奴隷ども、こいつを牢屋に入れろ。」彼はもう一年牢屋の中で過ごした。そこに、あるキリスト教徒の男が入ってきた。彼と判事は話をした。〔彼は言った。〕そして彼は判事にどうすれば解放されるかを教えた。そのキリスト教徒は判事から帳簿を受け取り、小麦だけについて書き、それをカラークーシュへ送った。彼は1か月後に大麦だけの帳簿を書き、また1か月後にそら豆だけの帳簿を書き、そのまた1か月後にひよこ豆だけの帳簿を書いた。そのすべてがカラークーシュのもとに届くと、彼は言った。「法学者よ、さぞ疲れたことであろう。（混ぜていたものを）これはこれ、それはそれと選別したのだから。この男を町で讃えてやれ。」¹⁶²⁾〔彼は言った。〕彼らは町で彼を讃えた。〔彼は言った。〕そこで判事は誓った。このままカラークーシュに仕えることは絶対にやめようと。

話 [172r:12-172v:1]

〔彼は言った。〕誰かに殴られたという若者がやってきた。彼は自分とともに5人の警護の男

161) 詩人はお褒めの言葉ではなく、褒美（金）を期待していた。カラークーシュが詩人に対する扱いを知らないことに、不満を表している。

162) カラークーシュは、判事が帳簿に数種類の穀物を混ぜたことを、実際の穀物を混ぜたと思ひこみ、激怒した。その後、種類別に分けた帳簿を受け取ると、判事がその混ぜた穀物を選別したとして労をねぎらった。帳簿上と現実の違いを理解していないことを示している。

を連れていった。〔彼は言った。〕その話は暴力をふるった彼の相手にも伝わった。そこで相手の男は先回りしてカラークーシュの傍らに立ち止まった。若者が近づくとその男は言った。「これが私をたたき、殴った男です。」すると、カラークーシュは若者を投げ倒したり殴ったりして、とうとう「私のほうが被害者でございます」と言い続ける男の死を見届けた。しかしカラークーシュは言った。「男のほうがお前より早く私のところに来たのだ。」人々は誓った。カラークーシュが統治者としてこの国にいる限り、ここにいるのはやめようと。

話 [172v:2-6]

〔彼は言った。〕数人の男がカラークーシュのところに一枚の証書を持ってきた。それには、カスル・アッ＝シャムウ地区に家を建てることについてムスリムらが行った証言が含まれていた。〔彼は言った。〕するとアミールのバハーウッディーン・カラークーシュはその証書を見て、言った。「その者、お前たちはユダヤ教徒の長の筆によってその証書を完成させたのか。」彼らは言った。「いいえ。」すると彼は言った。「これはすべて誤りで、嘘っぱちで、ばかげたものだ。」彼は証書を放り投げた。¹⁶³⁾

話 [172v:7-11]

〔彼は言った。〕ある老人と髭の生えていない少年がカラークーシュのところにやってきた。二人のそれぞれが「我がご主人様、(これは)私の家でございます。」と言う。そこで、カラークーシュは少年に言った。「お前はお前(の信用)を証明してくれる証書をもっているか。(ないであろう。)したがって、その家は老人のものでしかない。少年よ、彼に家を渡してやれ。少年よ、お前がこの老人の歳になったら、彼がこの家をお前に渡してくれるだろう。」これでおしまい。

話 [172v:12-15]

〔彼は言った。〕数人の男がある奴隷をカラークーシュのところに連れてきた。彼は手に鶏をもっていた。そこで彼は言った。「おいこの者、もしこの鶏がお前の目をつついたら、目をくりぬいているところだった。奴隷たち、この男から目の補償金を取れ。」¹⁶⁴⁾〔彼は言った。〕そしてその奴隷は誓った。カラークーシュが統治者であるような町には絶対に住まないと。

話 [172v:16-173r:5]

〔彼は言った。〕ある書記を務めるキリスト教徒の男がカラークーシュのところへやってきた。しかし、その男は真っ黒の墨つぼをもって入ることを恐れた。というのもカラークーシュは「お前は(不吉にも)朝から黒いものをもって我々のところにやってきたのか。」と言うからである。〔彼は言った。〕そこで、彼はそれを布きれの中に包んだが、リーカ(墨つぼに入れる絹糸)がそのキリスト教徒の脚に垂れてしまった。するとカラークーシュは彼に言った。「何たること。我らが主スルタンの帳簿において書き間違いをし、それをなめて消すものだから、お前の衣服が黒くなってしまったのだ。奴隷たち、この男を牢屋へ連れて行き、彼の衣

163) カラークーシュがムスリムの証人を信用せず、ユダヤ教徒による証書を重んじたことを示す。

164) 現実に起こっていない被害に対して、それを償うための金を請求している。

服が白くなるまで閉じ込めろ。その後（白くなったら）解放してやることにする。」

[173r:6-7]

『カラークーシュの裁きにおける愚かさの書選集』了。神に賞賛と祝福あれ。

4. 『カラークーシュ』写本における言語的特徴

最後に、本写本テキストの MA において、CA からの逸脱と判断できる箇所を列挙し、ここに見られる言語的特徴をまとめたい。

(1) 正書法

hamza の表記は、(رأس < رأس [169v: 3], هواء [171v: 3]) に単独の hamza、(رأى [171v: 4]) に 'alif を支えとする hamza と思しき小さい記号が見えるが、その他には見当たらない。'alif, wāw, yā を支えとする hamza の省略においては、支えの文字のみが残る。'alif を支えとする hamza のうち、語頭の hamza の省略例は非常に多く、すべての例を挙げることはできない。ここでは語中における省略例を示すにとどめる (رأيت < رأيت [169v: 5], رأى < رأى [171v: 4])。また wāw を支えとする hamza の省略 (هواء < هواء [171v: 3], هوى < هوى [172v: 4]) や、yā を支えとする hamza の省略 (جائعا < جائعا [171v: 10], مائة < مائة [171v: 10], رئيس < رئيس [172v: 5]) もそれぞれ確認された。単独の hamza の省略としては、単に hamza が消失する場合 (شى < شى [169v: 7], اساءت < اساءت [170r: 2], سوداء < سوداء [170r: 4, 173r: 4], الماء < الماء [171r: 15], الاهراء < الاهراء [172r: 1], السوداء < السوداء [173r: 1]) と、yā に置き換わっている場合 (بهاء < بهاء [169v: 5, 170r: 12, 170v: 5, 172v: 4], هوى < هوى [172v: 4]) がある。

なお、上には含めなかったが、動詞 جاء〈来る〉の各活用形は、hamza が省略され以下のような表記となる (جئتم < جئتم [170r: 14], جاءته < جاءته [170v: 11], جا < جا [172r: 13])¹⁶⁵⁾。同じく hamza の省略により、ب + جاء で1語となった動詞 جاب (jāb)〈持つてくる〉の未完了形が1例見られた (تجيبي به < تجيبي به [170v: 13])¹⁶⁶⁾。

その他の正書法に関しては、CA なら 'alif maqṣūra で表記するところを 'alif で表したものが4例あった (اللحي < اللحي [170r: 11], بقا < بقا [170v: 8], أوفى < أوفى [171v: 2], رمى < رمى [172v: 6])。本写本では、名詞と動詞のみに確認された¹⁶⁷⁾。

(2) 代名詞

二人称女性単数の接尾代名詞が كى と表記されている例が4例ある (تمتفكى < تمتفكى [170r: 6], بيعك < بيعك [170r: 7], تبعك < تبعك [170r: 7], معك < معك [170r: 8])¹⁶⁸⁾。معك 以外については口語の -ik ではなく、CA の -ki の発音を反映した

165) このような形式は、91 A.H. のパピルス文書にすでに現れており、MA の一般的な特徴といえる (Hopkins 1984: 81)。

166) Hopkins によれば800年頃に遡る例がある (Hopkins 1984: 81)。現代のエジプト (カイロ) 方言でも gāb としてよく使われる。

167) Hopkins (1984: 14-15) は、よく見られる綴りとして名詞・動詞・不変化詞の例をあげている。

168) Hopkins (1984: 64) には、انتى という独立形の例 (3c. A.H.) が挙げられている。

ものと思われるが、ほぼ同じ箇所正しく ك (ki) と書かれている例もあり (عتك , عتك [170r: 7]), 統一的ではない。カサノヴァ版・ハムザ版にはこのような例はなく、本写本のみに見られる特徴である。その他、近称の指示代名詞として、هذا 以外に ذا [172r: 10] が使われている¹⁶⁹⁾。

(3) 疑問詞

أى شيء [170v: 4] という形式が1例見られる¹⁷⁰⁾。

(4) 関係節

女性名詞の先行詞に対し、男性形の関係代名詞が用いられている (الامراة الذي < المرأة التي [170v: 6])。この不変化の الذي は MA の典型的な特徴である¹⁷¹⁾。

(5) 動詞

未完了形直説法・2人称男性複数の語尾の nūn が欠落している例 (تشكونه < تشكونه [170r: 14]), また否定命令に、要求法の代わりに直説法が使用されている例 (لا تقطعوا < لا تقطعون [171r: 12]) があつた。後者が過剰修正 (hyper-correction) かどうかはこの1例だけでは判断できない。

(6) 性・数の一致

双数名詞の主語を受ける述語の形容詞が、双数形ではなく複数形をとっている例 (الانثين كبير اللحي < الانثين كبير اللحي [170r: 11]), 2人の男性を受ける代名詞および動詞が、同じく複数形になっている例がある (جيتم , نفتما < نفتم , ويلكما < والكم)¹⁷²⁾。また、無生物の複数名詞を受ける代名詞に、3人称男性複数形を使用する例が2例ある (فكتيها < فكتيهم [172r: 3] , تلحسهم < تلحسها [173r: 4])¹⁷³⁾。数詞に関しては、男性名詞に対して女性名詞用の数詞が使用される例が1例あつた (خمس رجال < خمس رجال [172r: 13])¹⁷⁴⁾。

(7) 格

動詞の目的語に対して、対格 tanwīn の ʾalif が示されていない例 (نضايق لص غريب < نضايق لصا غريبا [171r: 12]) がある。反対に、主格であるべき語が斜格の形式をとっていたり (الانثين < الانثين [170r: 11])¹⁷⁵⁾、副詞的意味をもつ名詞が、前置詞に支配されているにもかかわらず、対格の tanwīn を保持している例 (من سوى امس واغدا < من سوى أمس وغدا [170v: 9])¹⁷⁶⁾などが見られた。

169) Schen (1973: 65-66) は、『回想録』に見られるこの形式について、エジプト方言の da を反映したものと述べている。しかし、これは CA における最小単位の指示代名詞でもあり、少なくとも本写本の例をエジプト方言の da と単純に結びつけることはできない。

170) 『回想録』においても、この形式が頻出する (Schen 1973: 65-66)。MA や NeoArabic では、ʾayy say / ʾeš / ʾaš 等の疑問詞が mā にとって代わったと指摘されている (Blau 1965: 108, 1977: 4)。

171) Hopkins (1984: 240-241) 。

172) Hopkins (1984: 94), Schen (1973: 75), 池田 (1987 [ウサーマ 1987: 16-17]) も参照のこと。

173) Hopkins (1984: 145-146) も参照のこと。

174) Hopkins (1984: 189-191)。数詞については他に、数詞20に複数対格名詞を後置した例がカサノヴァ版に見られる (عشرين جملا < عشرين جملا [171r: 15])。Hopkins (1984: 189-200)。

175) 同様の例については、Hopkins (1984: 167) を参照のこと。

176) このような「化石化した」غدا は、MA と現代方言の両方に認められる (Hopkins 1984: 167)。これとは反対に、カサノヴァ版・ハムザ版には、副詞において対格 tanwīn の ʾalif が欠落している例がある ([171v: 7] の箇所)。Hopkins (1984: 162-163) も参照のこと。

(8) 語彙

現代のエジプト方言と共通する語彙として、動詞では جاب〈もってくる〉が1例 (تجيبه [170v: 13])、راح〈行く〉が4例 (راحت [170v: 3], روى [170v: 5, 8, 10])、وَدَى〈連れて行く〉が2例 (ودوا [170r: 4], ودومها [170r: 14])、ساب〈離す、自由にする〉が1例 (سيبوا [171r: 9])、حط〈置く〉が1例 (فحط [171v: 16])、قتل〈殴る〉が1例 (قتلى [172r: 15])¹⁷⁷⁾認められた。形容詞では、اجرود〈髭のない〉が3例あった ([170r: 11, 12, 13])。

以上、本写本に見られる CA からの逸脱箇所を指摘した。文法的側面については、同じテキスト内で正しい形式を使用していながら、一部に逸脱した形式を用いるというかなり断片的なものである。したがって、疑似修正と思われる例はあるものの、単なる書き間違いという可能性もあり、断定することは難しい。ただ、本写本における逸脱の方向性が、他の MA 資料と同様、概ね新アラビア語の特徴に沿っていることも事実である。一方語彙については、方言 (現代エジプト方言など) で使われる語彙が散見され、少なくともこれらが15世紀に使用されていたことが確認できた。

[転写方式]

ء=ʾ / ب=b / ت=t / ث=ṭ / ج=j / ح=h / خ=x / د=d / ذ=d / ر=r / ز=z / س=s / ش=š / ص=ṣ / ض=d / ط=ṭ / ظ=z / ع=ʿ / غ=g / ف=f / ق=q / ك=k / ل=l / م=m / ن=n / ه=h / و=w / ي=y

[参考文献]

- Abd-allatif (tr. Silvestre de Sacy) 1810. *Relation de l'Egypte*. Paris, L'Imprimerie impériale.
 Atiya, A.S. 1971. Ibn Mammāṭī. *Encyclopaedia of Islam*, new ed.. Vol.III. 862-863.
 Badawi, El-Said and Hinds, Martin. 1986. *A Dictionary of Egyptian Arabic*. Beirut, Librairie du Liban.
 Barthélemy, Adrien. 1969. *Dictionnaire arabe français: dialectes de Syrie, Alep, Damas, Liban, Jérusalem*. Paris, P. Geuthner.
 Blau, Josha. 1961. The Importance of Middle-Arabic Dialects for the History of Arabic. *Scripta Hierosolymitana*, 9, 206-28. [=Blau 1988, 61-84]
 Blau, Josha. 1963. Hyper-Correction and Hypo-Correction (Half-Correction) in Pseudo-Correct Features. *Le Muséon*, 76, 363-67. [=Blau 1988, 306-310]
 Blau, Josha. 1965. *The Emergence and Linguistic Background of Judaeo-Arabic: A Study of the Origins of Middle Arabic*. London, Oxford University Press.
 Blau, Josha. 1966-1967. *A Grammar of Christian Arabic, based mainly on South-Palestinian texts from the first millennium*. 3vols. Louvain, Secrétariat du CorpusSCO.
 Blau, Josha. 1974. Classical Arabic, Middle Arabic, Middle Arabic Literary Standard, Neo-Arabic, Judaeo-Arabic and Related Terms. In Sidney B. Hoenig and Leon D. Stitskin (eds.) *Joshua Finkel: Festschrift in Honor of Dr. Joshua Finkel*, New York, Yeshiva University Press, 37-40. [=Blau 1988, 255-259]
 Blau, Josha. 1977. The Beginning of the Arabic Diglossia. *Afroasiatic Linguistics*, 4: 4, 1-28. [=Blau 1988, 1-38]
 Blau, Josha. 1980 [repr. 1995]. *A Grammar of Mediaeval JudaeoArabic*, 2 ed. Jerusalem, The Magnes Press.
 Blau, Josha. 1981. The State of Research in the Field of the Linguistic Study of Middle Arabic. *Arabica* 28, 187-203. [=Blau 1988, 118-134]

177) ただし、〈殴る〉という意味の قتل は、近年のエジプト方言では使われない。Spiro (1895), Badawi and Hinds (1986) の辞書にもこの意味の記載はない。

- Blau, Joshua. 1988. *Studies in Middle Arabic and its Judaeo-Arabic Variety*. Jerusalem, The Magnes Press.
- Brockelmann, Carl. 1943-49. *Geschichte der arabischen Literatur*, 2 ed., 2vols. Leiden, E.J. Brill.
- Brockelmann, Carl. 1937-38. *Geschichte der arabischen Literatur*, Supplementbd., 3vols. Leiden, E.J. Brill.
- Casanova, Paul. 1893. *Ḳaraḳūḥ. Mémoires publiés par les membres de la Mission Archéologique Française au Caire*, tom.6. fasc.3., 447-491.
- Derenbourg, Hartwig. 1886. Ousama Ibn Mounqidh: un émir syrien au premier siècle des croisades (1095-1188). Paris, Ernest Leroux.
- Fischer, Wolfdietrich. 1991. What is Middle Arabic? In Aran Kaye (ed.) *Semitic Studies: In Honor of Wolf Leslau on the Occasion of his Eighty-fifth Birthday November 14th, 1991*. Wiesbaden, Otto Harrassowitz, 430-436.
- Ḥamza, ‘Abd al-Laṭīf. 1982. *Ḥukm Qarāqūṣ*. Cairo, Dār al-Hilāl.
- Hopkins, Simon. 1984. *Studies in the Grammar of Early Arabic: Based upon Papyri Datable to before 300A.H./912A.D.* Oxford, Oxford University Press.
- Ibn Mammātī. *Muxtār min-mā Nuqila min Kitāb al-Fāṣūṣ fī Ḥukm Qarāqūṣ*. Cairo, Dār al-Kutub, Ms. majāmī‘ 59.
- Ibn Mammātī. (ed. by ‘Aṭīyya, ‘Azīz Sūryāl). 1991. *Kitāb Qawānīn ad-Dawāwīn*. Cairo, Maktabat Madbūlī.
- Kitchener, Salīm. 1996. *al-‘Arājūz*. Cairo, al-Hay’a al-Miṣrīya al-‘Āmma li-al-Kitāb.
- Lentin, Jérôme. 2008. Middle Arabic. *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*, vol.III. Leiden, Brill. 215-224.
- Mahdi, Muhsin (ed.). 1984. *The Thousand and One Nights (Alf Layla wa-Layla): From the Earliest Known Sources, Part I: Arabic Text*. Leiden, E.J. Brill.
- Schen, I. 1972-1973. Usama ibn Munqidh’s Memoirs: Some Further Light on Muslim Middle Arabic (Part I, PartII). *Journal of Semitic Studies*, 17/2, 218-236, 18/1, 64-97.
- Slane, William MacGuckin, baron de (tr.). 1842-1871 [repr. 1961]. *Khalikan’s Biographical Dictionary*, 4vols. New York, Johnson Reprint Corporation.
- Spiro, Socrates. 1895 [repr. 1999]. *An Arabic-English Dictionary of the Colloquial Arabic of Egypt*. Beirut, Librairie du Liban Publishers.
- Sobernheim, M. 1978. *Ḳarāḳūṣ. Encyclopaedia of Islam*, new ed., Vol.IV, 613-614.
- [as-Suyūṭī, Jalāl ad-Dīn.] 1311/1893. *Kitāb al-Fāṣūṣ fī ‘Aḥkām wa-Hikāyāt Qarāqūṣ*. Bulaq, aṭ-Ṭab‘a al-Xuṣūṣīya.
- as-Suyūṭī, Jalāl ad-Dīn. *Kitāb al-Fāṣūṣ fī Ḥukm Qarāqūṣ*. London, British Library, Ms. Or. 6646.
- ウサーマ・ブヌ・ムンキズ (藤本勝次・池田修・梅田輝世訳注) 1987.『回想録』関西大学出版部.
- 佐藤次高 1991.『マムルーク』東京大学出版会.
- 佐藤次高 1996.『イスラームの「英雄」サラディン』講談社.
- 高階美行 1998.「アラビア語研究における若干の視点」池田修監修『世界地域学への招待』嵯峨野書院. 199-210.
- 高階美行 2001.「アラビア文字」河野六郎他編著『言語学大辞典別巻 世界文字辞典』三省堂. 42-59.
- 藤本勝次・判康哉・池田修訳 1970.『コーラン』中央公論社.

[付記]

本稿は平成21年度科学研究費補助金 (特別研究員奨励費、課題番号20・40040) による研究成果の一部である。有益なご指摘を下さった査読者の方々、写本の解釈においてご助言をいただいた大阪大学の Hosam Kasim 先生に、お礼申し上げます。

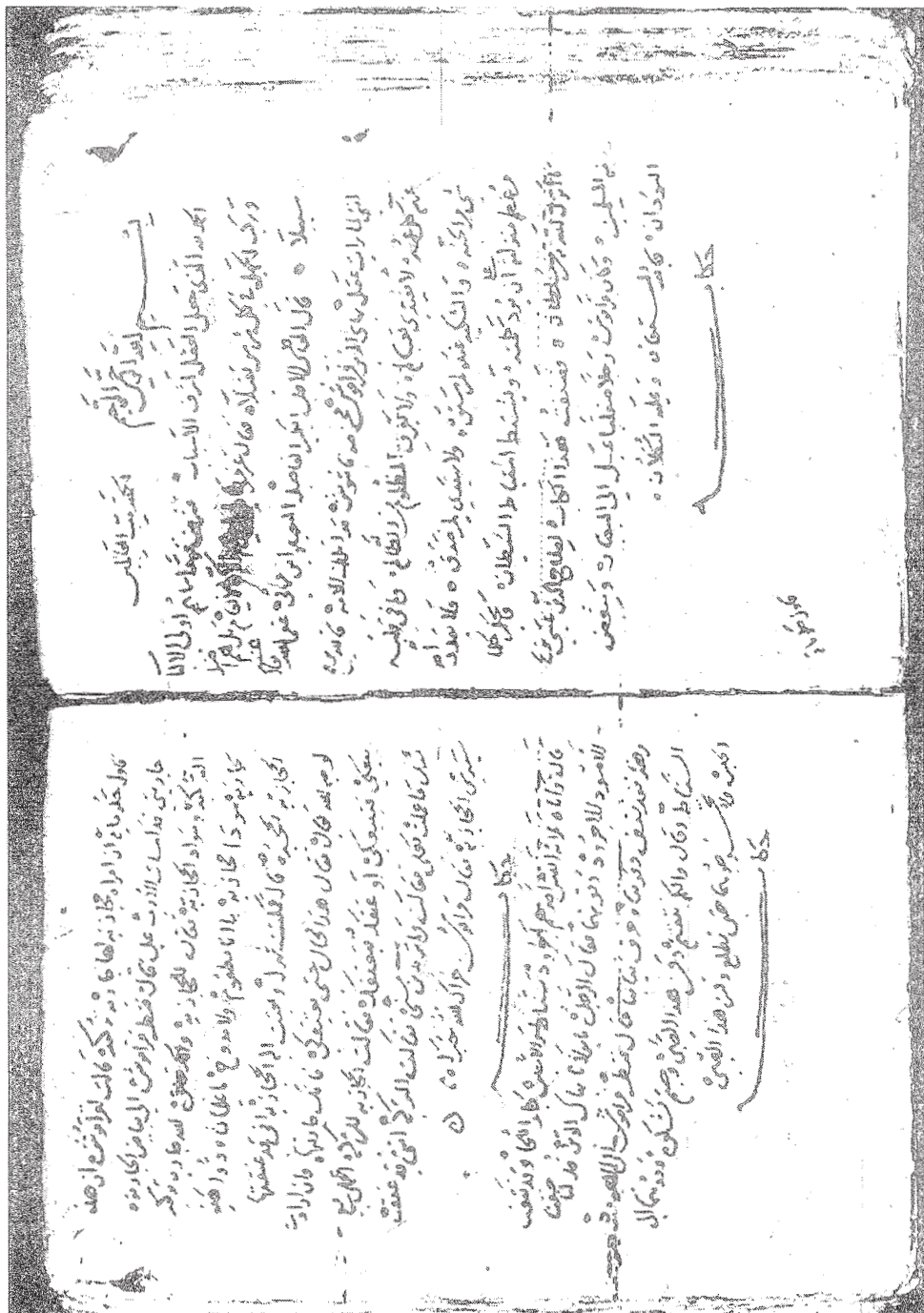


図 1 : Dār al-Kutub, Ms. majāmī' 59, folio 169v, 170r